
ポケットモンスター ～お嬢様とレックウザ～

まどろみ猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター ～お嬢様とレックウザ～

【Nコード】

N4861Z

【作者名】

まどろみ猫

【あらすじ】

無気力・無表情なお嬢様の、十六歳の誕生日。仕事で滅多に屋敷に帰ってこない父から送られてきた誕生日プレゼントは、伝説のポケモン・レックウザだった！？ポケモンを持ったことなどないお嬢様、自分には資格がないと逃がそうとするが、人語を理解するどころか話すこともできるレックウザに気に入られてしまい…！？

自分の生きることの意味を見いだせなかったお嬢様が、人と触れ合い命の大切さを学んでいく。ポケモンと人は、どのような関係であることが理想なのか？生きる意味は見つかるのか？

ジヨウト地方での、知られざる少女の成長の物語。

誕生日（前書き）

ポケモンで、書きたいと願ってありましたまどろみ猫です。夢が叶って嬉しいです。

私は少しでも上達したいので、よろしかったら感想やアドバイスをお願いします。厳しいコメントも、自らの糧としていきたいと思っています。が、登場人物に対する批判はおやめください。

至らぬ点は多々あると思いますが、よろしかったらご覧ください！

誕生日

私の名前はカノン。自分で言うのも何だが、お嬢様だ。…外見は、そうは見えないだろうけど。

私の住んでいるジョウト地方は、なかなか住みやすい地方らしいらしいというのは、私はこの地方はおるか、自宅である屋敷からも滅多に出ないからだ。

出ですることなどないし、したいこともない。だから、毎日の学習を終えると無意味に時間を潰す。昼寝をしたり本を読んだりピアノを弾いたりテレビを観たり…だらだらと、時間が過ぎていく。

両親もいない、友達もいない、ポケモンも持っていない私の話し相手は、屋敷で働くメイドさん達くらい。まあ、話すこともないけど。

「お嬢様。旦那様から、小包が届きました」

春の、日差しの心地よい午後。ソファに寝そべって惰眠を貪っていた私は、主であるパパに代わって屋敷を管理している万能執事・ラストの声に目を覚ました。

「…ラスト。仮にも十五歳のレディの部屋に、ノックもなしで入ってくるなんて無礼じゃなくて？」

眠い目を擦りながら、一応抗議する。

「ノックをしても、お返事がなかったもので。…それに、お嬢様はまだまだ子供ですよ」

ふふふつと含みのある笑い方。明らかに、私の発育を笑っている。…まな板じゃ、子供扱いされてもしょうがないか。特に怒りもせず、手を差し出す。

「そうね。私は子供ね。…パパから便りがあるなんて、珍しいわ」
頂戴と、差し出した手。恭しく渡されたのは、綺麗にラッピングされた小さな箱。

「何かしら？…あら、カードがついてる」

広げて、声に出して読む。ラストも、内容が気になるだろうから。「何々…カノン、誕生日おめでとう！十六歳になったカノンに、パパからプレゼントだ！きつと驚くぞ！カノンの誕生日を祝えないのが残念だが、パパはいつでもカノンのことを想ってるぞ！帰る日ができたら、連絡するからな！」…ああ、今日は私の誕生日だったの？」

読み上げてから、ソファの横で控えるラストに訊く。

「…お嬢様、ご自分の誕生日をお忘れにならないでください」

心底呆れた顔のラスト。若いが無能なこの執事、顔までいいのだから、よほど神様に愛されている。

ただラストにとって不運だったのは、敬愛する主人に仕えることができず、私のような娘の面倒を見なくてはいけなかったことだ。

「私の生まれた日に、何か意味があるの？」

生まれてきた日に、生まれたことに、何の意味があるというの？

「…お嬢様、旦那様が悲しまれますよ」

私の言葉の意味を察してか、ラストは眉をひそめた。でも、それもどうでもいい。

そう、すべてがどうでもいい。私は何の為に生きているのか、わからずただ生きているだけなのだ。

無意味に、無気力に。ただ、生きるだけ。

「…旦那様からのプレゼント、ご覧にならないのですか？」

ごろん、とまたソファに寝転がった私。そのまま微睡むつもりだったのだが、ラストの声に妨害された。

「どうやら、『私が驚く』プレゼントに、興味があるらしい。」

「ラスト、見たい？」

箱を渡そうとすると、首を振られた。私へのプレゼントなのだから、私が開けなくてはいけないのだそうだ。

「…わかった。開けるわね」

普段無表情の私が、驚くものとはなんだろうか？

「これは…モンスターボール？」

小さな箱に入っていたのは、見慣れた物体だった。ただし、変わった色の。

「紫色のボール…パパがいる地方では、これが普通なのかしら？」

そつと持ち上げてみる。意外にも重い。

「ねえラスト。Wの文字があるわ…ってどうしたの？」

隣にいたラストは、食い入るようにそのボールを見つめていた。思ったたら、その目が輝きだす。

「これはっ！マスターボールですよお嬢様！」

「マスターボール…ポケモンを必ず捕獲できるという、幻のボール？」

トレーナーではない私だが、知識はある。この万能執事に叩きこまれた知識が。

「さすが旦那様！お嬢様の為にこんな希少なボールを入手されるとは！」

ラストが興奮し始めた。冷静沈着な彼は、パパが絡むと豹変する。

「でも、このボール未使用なのかしら？」

振っても、音はしない。それはそうか。

「それに、私ポケモンをゲットしたりはしないし…ラスト、あげる」
渡すと、ポッポがタネマシンガンを食らったような顔をするラスト。と思ったら、狼狽して突っ返してきた。

「だ、だめですよお嬢様！これは、旦那様からのプレゼントなのですから！」

優秀なトレーナーでもある彼なら、有効に使ってくれると思ったのだが…。

「そ、そうです！マスターボールがプレゼントだとは思いますが、一応中身を調べなくては！」

…素直に、受け取ればいいのに。私は、要らないのだから。

屋敷には、ポケモン転送装置がある。一般家庭にはまずないが、

パパがお仕事で使っているのだ。

使ったことがないので、ラスタに操作してもらおう。慣れた指捌きでキーボードを打つと、装置に紫色のボールをセットした。

「中にポケモンが入っていたら、画面に名前と姿が表示されます。

…楽しみですね」

につこり微笑みかけてくるラスタ。子供みたいだ。

「…では、お願い」

「はい！」

たたたたと、彼の長い指が素早く動いた。そして、画面に表示されたのは…

「…レックウザ。伝説の、ドラゴンポケモン？」

「…お嬢様！もつと驚いてくださいよおおおおおっ！」

まったく表情を変えない私に、ラスタがツッコむ。

「レ、レックウザですよ！？ホウエン地方で語り伝えられる、幻のポケモンですよ！？」

ラスタ、驚いてるわと思いつつ、こくりと頷く。

「知っているわ。読んだ本に壁画が載っていて、こんな風だったわ」

画面を指差す。長い筒状の鮮やかな緑の身体、二本の鋭い爪のついた手、これまた鋭い牙が生えた口。

「パパ、ホウエン地方にいるのかしら？」

「そこじゃないですよお嬢様」

平静を取り戻したラスタに突っ込まれる。

「…それにしても、まさかレックウザとは…さすがです旦那様！このラスタ、一生ついていきます！」

…まだ混乱しているようだ。

「…ラスタ、ついてきてくれる？お庭で、レックウザをボールから出したいのだけれど…」

こんな状態の彼では正直頼りないが、屋敷で一番ポケモンの扱いに長けているのも彼なので、同行を頼む。

「…へっ！？レックウザを、ボールから出す！？」

∴それから、小一時間お説教が始まった。

誕生日（後書き）

読んで下さった方、ありがとうございます！

え、なぜにレックウザ？と尋ねられれば、好きだからとしかお答えできません。可愛いですよレックウザ！

シリアス、ほのぼの、ギャグ、冒険、友情、恋愛…これらの要素を含めて、頑張りたいです。

他の作品も投稿していますので、よろしかったら…その、そちらも…どうぞ。

レックウザはお怒りのようです(前書き)

お気に入り登録してくださった方がいらっしやっただようで、驚きました。ありがとうございます！…でも、その…よろしかったら、今後の精進のために感想を頂きたいな、と…。お願いします！上達したいのです私！

今回で、ようやくレックウザが登場します。…氷技で一撃、なんて言わないでくださいよ！？弱点がないポケモンなんて、悪&ゴーストタイプだけです！

レックウザはお怒りのようです

「よろしいですかお嬢様？伝説のポケモンとは、他のポケモンとは一線を画した存在なのです。その能力たるや凄まじく、天災を引き起こしたりもします。ポケモンをお持ちになつていないお嬢様が、このレックウザを従えるのは、不可能でしょう。なぜなら……」

口をはさむ隙がない。かれこれ一時間は話し続けている。

「……ですから、レックウザをボールから出すのは、旦那様がお帰りになったときでなくては。暴走した場合、このお屋敷は壊滅し、辺り一面は火の海になるでしょう。旦那様は、私など比較にならないほど優れたトレーナーでもあられます。その日まで待つて……」

「……やだ」

呟くと、ラスタの説教じみた説得は中断された。

「……お嬢様？」

「パパがいつ帰って来るかもわからないのに、ずっとこのレックウザを閉じ込めておくの？私はこのレックウザを逃がしたい。このレックウザも、そう思ってるはずよ」

紫色のボール。人からすれば夢のようなこのボールは、ポケモンからすれば悪夢のようなボールだろう。

投げられたら、そこでお終い。パパがこのレックウザとバトルしたのかは知らないけれど、どれだけ悔しかっただろうか。

抗っても、強制的に押さえつけられ、捕獲される。そんなのは。

「……ラスタ、教えてくれたわよね。ポケモンと人は、主従の関係ではなく、対等なのだ。お互いを認め合い、歩み寄り、協力するのが真の姿だと。……嘘じゃないわよね？」

ポケモンの優れた力を、道具とみなし利用する人もいる。それは、知っている。

「……私は、このレックウザと対等になれるような人間じゃないの。トレーナーとしてどころか、人としても欠けている私には。だから

…」
勝手なことを言っているのは、わかっている。パパは私の為にこのレックウザを捕獲し、私は私の考えでこのレックウザを逃がそうとしている。

私達親子の都合に振り回されるレックウザからしてみれば、たまたたものではないだろう。

「…お嬢様」

顔を上げると、ラストが辛そうな顔をしていた。何で？

「わかりました。このラスト、お嬢様のお心のままに」

一礼すると、ラストは私の手を取った。

「…ご安心ください。お嬢様は、私がお守りします」

庭へと向かう彼に手を引かれている私は、その背中ににじむ覚悟に、罪悪感と感謝の念を抱いた…。

屋敷の使用人を全員避難させ、敷地内にいるのは私とラストと、彼のポケモン達だけ。

「…さあ、お嬢様。ボールを投げてください」

緊張に顔を強張らせた彼。その隣で闘志まんまんな、彼のライチユウ。

「…ごめんなさい。ラスト」

こんなの、執事の仕事じゃない。命を懸けてまで、彼が私に付き合うことはない。

私一人なら、どうなったってかまわない。でも、彼は違うはずだ。彼を必要としている人は、確かにいる。

謝ってすむことではないけれど、謝罪の言葉が勝手に出ていた。

驚きに目を見開く彼を横目に、ボールを投げる。…全然とばない。数メートルの距離に落下したボールから、かっと光が発せられる。

「ぐおおおおおおおおおおおん！！」

轟いたのは、咆哮。あまりにも大きなその声に、耳を塞ぐ。

「ぐるるるるる…」

唸り声。巨大な伝説のポケモンが、目の前にいた。細長い筒状の身体は鮮やかな緑色で、黄色の輪のような模様がある。私を見つめる瞳は爪や牙と同じく鋭く、恐ろしい。

恐ろしい。けれど、何と雄大な姿だろうか。

私は、見惚れていた。その巨大で、美しい姿に。その、命の輝きに。

「貴様が、あの男の娘か？」

突如として頭の中で響き渡った、若い男性の声。まさか、誰かいるの？

辺りを見回しても、目に入るのは綺麗に整備された庭と、レックウザと、ラスタとライチユウだけ。誰も、いない。

「お、お嬢様？どうされたのですか？」

レックウザを警戒しながらも、私を気遣うラスタ。彼には、今の声が聞こえなかったのだろうか？

「今、男の人の声が……」

「それは吾輩だ」

また、聞こえた。やっぱり、誰かいる。

「吾輩？……レックウザ、あなた話せるの？」

「ふん。話してはおらん。……まあ、テレパシーのようなものだ。その男には聞こえておらんぞ」

ぶんと尻尾を振ると、風圧が生まれて髪が乱れる。すごい風圧だ。

「吾輩の質問には、しっかりと答える。貴様が、あの男の娘かと訊いた」

「あの男？」

聞き返すと、苛立ったように尻尾を地面に叩きつける。どれほどの力で叩いているのか、地面が揺れる。

「吾輩を、貴様が手にしたそれで捕らえた男だ」

それ、とはマスターボールのことだろう。忌々しげに紫色のボールを睨むレックウザ。

「…ええ。あなたを捕獲したのは、私のパパだと思うわ」
その瞬間。とてつもない殺気を感じた。

「お嬢様！」

ラストに腕を引かれ、私の立っていた場所にレックウザの尻尾が叩きつけられる。先程の比ではなく、地面が抉れた。

助けてもらわなくては、死んでいた。

「…ありがとう、ラスト」

「お礼など結構です！」

背後に私をかばい、ラストがレックウザを睨みつける。ライチュウが、頬袋からビリビリと微かに放電している。

「…これしき、自らで避けることもできないか。貴様如きが、この吾輩を従えようなど笑止千万！」

向けられた視線には、侮蔑がこもっていた。テレパシーが通じていないラストにも、それがわかつたらしい。

「…お嬢様、レックウザは何と言ったのです？」

「この程度、自分で避けられないのか。貴様などが私を従えようなど、笑わせるな！…と言っているわ」

レックウザの言う通りなので、淡々と伝える。従えるつもりはないけれど。

「吾輩を従えるどころか、貴様のような虚ろな娘に仕えねばならんその男も不憫よ。あの男に仕えればよいものを…人間の、事情というやつか？」

小馬鹿にしたように、レックウザが笑う。黒く縁どられた口が吊り上がったので、おそらく笑ったのだろう。

「…お嬢様」

通訳を、と目で乞われ、そのまま伝える。

「私を従えるどころか、貴様のような空っぽな娘に仕えなくてはならないその男も不憫だな。娘の父親に仕えればよいのに…人間の事情というやつか?…と言っているわ」

「…何ですって?」

ラストの雰囲気、変わった。…怒った、のだろうか？

「…伝説のポケモンだからって、好き勝手言ってくれますね。こんな人を見る目もない子蛇に、マスターボールを使う価値なんてありませんよ」

「何だと!？」

レックウザが、怒りの声を上げる。今しがたまで侮蔑を浮かべていた目は、憤怒に染まっていた。

「人を見る目がない、と言ったのです。お嬢様は、一見すると無気力で何もする気のないダメ人間のようですが、とても優しいお方です。そのことに気付きもしないあなたに、よく伝説なんて大層な呼び名が付いたものですね」

「ふん！優しいだど!？己の力もわきまえぬ人間が、偽善に酔っているだけであるうが!」

吐き捨てるように、レックウザは言った。

「実に下らぬ!」

張り詰めたような緊迫感。のどかな庭にはまったく似合わない。

…私は、戸惑っていた。ラストの言葉に。

優しい？私が？

「お嬢様。この子蛇の通訳を、お願いします」

戸惑う私そつちのけで、睨み合う両者。

「…えつと…優しさなど、己の力もわきまえない人間が、偽善に酔っているだけだ。下らない…ですって」

私の訳を聞いたラストは、腕を組んで笑った。

巨大な身体を見上げるその目にあるのは、勝ち誇ったような色。

「…やはり、人を見る目がありませんね。お嬢様は、自らの行為に酔いしれるような愚かな方ではありません。この方の真なる優しさを、そんな低俗なものと捉えるあなたのほうが、己をわきまえるべきですよ」

「…調子にのりすぎだ、人間!」

レックウザの怒りが、爆発した。通訳なしだが、ラストにはその

咆哮の意味がわかったらしい。

開戦の、咆哮。

「…上等です！私の主を侮辱したことを、後悔しなさい！…」
こうして、戦いは始まった…。

レックウザはお怒りのようです（後書き）

：カノンお嬢様そっちのので、レックウザとラストが喧嘩してま
すね。正直言つて、彼の存在は一話限りでした。しかも、名前なし
のただの執事です。ですが、話を進める上で彼の存在が必要になっ
てくることに気が付き、こうして立派な主要人物となりました。考
えた人物は全員好きですが、彼もなかなかお気に入りです。

今のところ、人物の容姿の描写はなしですが、これからの話でし
ていきます。現在わかるのは、カノンお嬢様がまな板ということぐ
らいでしょうか（笑）。

ポケモン大好きなのにバトルは苦手。こんなまどろみの作品です
が、楽しんでいただけたら嬉しいです！

見たくないの(前書き)

ごめんなさい、ラスト。2話でのキミの名前、間違えてました。

…ラスク？誰それ、です。後書きで「お気に入りです」とかどの口が言うのでしょうか。…反省します。

え、何故か私が投稿しようとするエラーになります。ので、書きあげているのに更新できないという事態が起こるかもしれません。…投稿したいのですよ！？まどろみは！

…お気に入り登録してくださいった方、お読みになってくださった方、ありがとうございます。私は小説が大好きですので、これからも頑張っていきたいです！

見たくないの

「くらえ！」

レックウザの口から放たれた、『りゅうのいぶき』。

「ライチュウ！『まもる』！」

「ライツ！」

ラストの指示に、即座に従うライチュウ。瞬時に球状の壁を展開し、身を守る。

「小癩な！…叩きのめしてくれ！」

防がれたレックウザは、尻尾をゆらりと振った。振られた尾が、鋼の輝きを帯びる。

「ライチュウ、『10まんボルト』！」

「ラツ…」

応え、身体から電気エネルギーを放とうとするよりも早く、
「遅い！」

レックウザの尾が、ライチュウを吹き飛ばした。おそらく、『たたきつける』ではなく、『アイアンテール』。

「ライチュウ！？…すまない、戻れ！」

植え込みで戦闘不能状態となったライチュウを、ボールに戻すラスト。得意げなレックウザを、悔しげに見据える。

「…むっ！？身体が…！？」

そのとき、レックウザの動きが鈍くなった。
にやりと、ラストが笑う。

「…『せいでんき』。ライチュウの特性です。物理攻撃してきた相手を、麻痺させる…運がないですね」

好機とばかりに、モンスターボールを投げる。現れたのは、ジュゴン。

「許さぬぞ！人間！」

麻痺したというのに、レックウザの闘志は衰えない。それどころ

か、ますます怒り、高まっている。

「通訳は結構ですよ、お嬢様!…ジユゴン、『ねこだまし』!」

ジユゴンが、小さな手を叩く。びくりと、レックウザの巨体が怯む。

「今です!『れいとうビーム』!」

氷タイプの技は、ドラゴン&飛行タイプのレックウザには効果抜群。大ダメージを受ける。

ただしそれは、『当たれば』の話だ。

「…馬鹿な!麻痺してなお、これほどの速さで動けるとは…!」

『ねこだまし』の追加効果で怯んだレックウザだったが、発射された『れいとうビーム』を飛んで回避してみせた。

「…はっ!伊達に伝説と呼ばれておらんわ!」

驚くラストを嘲い、麻痺したとは思えない速度でジユゴンを翻弄するレックウザ。

「ジユゴン!『ごごえるかせ』!」

「甘いわ!」

広範囲の氷技に、すかさず上空に飛び上がって躲したレックウザは、

「恨むならば、吾輩に刃向った愚かな主を恨め!」

急降下して、ジユゴンを鋭い爪で切り裂いた。

『ドラゴンクロー』。完璧に、決まった。

しかしジユゴンは、倒れなかった。

「なっ…!?!」

レックウザは驚き、動きを止めた。

今にも力尽き、倒れそうな、ジユゴンの間近で。

「最大パワーで『ふぶき』!」

「ジユゴオン!」

瀕死の状態で繰り出される、ジユゴンの『ふぶき』。

「ぐおおおおおおお!?!?!?!」

吹き荒れる『ふぶき』。その威力は凄まじく、庭の木々が全て凍

りつき、私は余波で吹き飛ばされそうになった。

視界が白で覆われ、何も見えなくなる。が、レックウザの苦悶の咆哮ははつきりと聞こえた。

「…やめて」

私の声など、その苦痛の叫びにかき消される。

「ジュゴン!? しつかりしなさい!」

視界が晴れ、私の目に映ったのは、傷つき倒れたジュゴンと駆け寄るラスタの姿。

「…はっ、…はっ…」

そして、荒く息をつくレックウザ。かなりのダメージを負っているようだ。

それなのに、瞳に宿る闘志は微塵も薄らいでいない。

「…ありがとうございます、ジュゴン。よくやってくれました」

ボールにジュゴンを戻し、レックウザと向き合うラスタ。その手には、すでに三体目のモンスターボールが握られている。

彼の目にも、戦うという決意があった。このレックウザに何としても打ち勝つという、強い決意が。

…私は、何をしているのだろうか。一番の当事者であるはずの私が、傷つくこともなく傍観しているなんて。

「…なかなか根性のあるジュゴンではないか。驚かされたぞ」

にいと笑う、レックウザ。身体は、ぼろぼろだ。

「そちらこそ、私のジュゴンの『ふぶき』を受けてまだ立っているとは…さすがですね」

賛辞に賛辞で返すラスタ。三体目のボールを握る手が、震えている。…それは怒りか、恐怖か、悲しみか、武者震いか…。

わからない。レックウザの言う通り、空虚な私には。…だけど。

「…いや」

もういやだ。これ以上、傷つくところを見るのは。

このまま戦い続ければ、失ってしまいそうな気がする。…大事な、何かを。

「やめて！ラスタもレックウザも、もうやめて！」

「やかましい！引っ込んでおれ、小娘！」

張り上げた声も、レックウザの唸りに近い怒鳴り声で一蹴されてしまう。

「お嬢様、危険ですからそこにいてください」

レックウザが止まらない限り、ラスタも止まる気はない。静かに言うと、ボールを振りかぶった。

いけない。また始まってしまう。

私は、駆けだしていた。衝動的に。

頭にあるのは、止めなくてはという思いだけ。

「…血迷ったか小娘」

ラスタは、はるか後方にいる私が駆け寄って来ていることに気付いていない。

そして、レックウザの言葉は私にしかわからない。

レックウザの尾が、揺れる。

来る！

そう感じ、振り下ろされた尾を間一髪回避する。…レックウザが麻痺していなければ、躲すことなど到底不可能だっただろう。

「ほう…」

レックウザの目がわずかに見開かれ、

「お嬢様!?!」

振り返ったラスタが、悲鳴に近い声で私を呼んだ。

「ラスタ！命じます、動かないで！」

モンスターボールを投げようとした彼を止め、そのまま走る。

手にあるのは、マスターボール。

「小娘、貴様何を…」

「…そこまでよ、レックウザ！」

レックウザの言葉を遮り、マスターボールを向ける。

「戻りなさい、レックウザ！」

私の声と同時に、ボールから放たれた赤い光線がレックウザに当

たった。

「…貴様」

ボールに戻される寸前、レックウザは私の目を見て…笑った。

怒りでも驚きでもない…その目にあるのは、もっと別の…。

緑色の巨体が消えた庭に転がっていたのは、一個の紫色のボール
だった…。

見たくないの（後書き）

…まだ旅立ちもしないなんて…進行の遅さに愕然とするまどろみです。オリジナルキャラばかりで、公式のヒビキくんやコトネちゃんが出てきません。これはまずい！

「…私では、役不足？…そうよね」

…ってああ！？カノンお嬢様が心なしかがっかりしておられる！？「まどろみさん…私の名前を間違えただけでなく、お嬢様をがっかりさせるとは…覚悟はできていますか？」

ひいひいひいひい！！ごっ、ごめんなさいひいひいひい！！

「作者・まどろみ猫逃亡のため、後書きを終了します。読んでくれた人、ありがとう！」

「近いうちに、私達にも出番があるってことね！」

「…ふん。別に、どうでもいいけどな」

気に入った！（前書き）

はい、前回の後書きでラストさんに追っかけられたまどろみ猫です。：バトルの描写は難しいです。このお話は、お嬢様の人として、トレーナーとしての成長を描きたいので、バトルはあまりしません。それでもいいよという方は、どうぞお読みください。

気に入った！

屈んで、マスターボールを拾う。

「…お嬢様！ご無事ですか！？」

ゆっくりと、駆け寄ってきたラストの方を向く。

「…ラスト」

急に、足から力が抜けた。どうしてだろうと客観的に考えていると、ラストが抱きとめてくれた。

「ラスト、大丈夫？怪我とかしていない？」

ポケモンバトルでは、技に巻き込まれてトレーナーが大怪我をすることだってある。心配になって訊くと、

「…！こちらの台詞ですよ、カノンお嬢様…！」

ぎゅっと、抱きしめられた。…よかった、怪我はしていないようだ。

「お嬢様の身が危ういのに、動くななどと…！もう二度と、あんな命令はしないでください…！」

抱きしめてくるラストの腕は、強くて。

絞り出すような声は、泣き出しそう。

「…うん。ごめんなさい…！」

私は、謝っていた。

ラストを、苦しめてしまったと気付いたから。

自己嫌悪、というものがある。今の私は、正にその自己嫌悪中だ。

『戻りなさい、レックウザ！』

…何だ、あの言い方は。あれではまるで、私がレックウザのトレーナーのようだ。

…私に、トレーナーの資格などないのに。

「お嬢様、御気分はいかがですか？」

いつの間にか、ラストが部屋にいた。心配そうに、ベッドで寝て

いる私を窺う。

「…良くは、ないわ。私、レックウザに命令してしまったから」

身体を起こして、膝を抱える。平らな胸だと、この姿勢はとりやすいのだ。

「…レックウザ、怒っているでしょうね」

ナイトテーブルに置かれた、マスターボール。ランプの明かりを受け、妖しい紫色に輝いている。

「あんな偉そうなこと言っておいて…ライチユウもジユゴンも、レックウザだって傷ついた。みんな、私のせいだわ…」

膝に、顔を伏せる。申し訳なくて、ラスタの顔が見れなかった。

「…お嬢様。やっぱりあなたは、お優しい方です」

どんな顔をして、そんなことを言うのか。

「やめて。…私は、優しくなんてないわ」

顔を伏せたまま、言う。胸が、苦しい。

「…やさしく、なんか…！」

ぐっと、溢れてきそうになるものを押さえつける。無理矢理に。

泣かない。泣けない。私に、涙なんてないはずだもの。

「…出て行ってラスタ。一人に、してちょうだい」

そう言わなくては、彼はここに居続けるだろうから。…居たくもない、はずなのに。

「わかりました。カノンお嬢様、お休みなさい」

「…おやすみ、ラスタ」

ドアが、静かに閉められた。

案の定、私の両目から涙が零れることは、なかった…。

カノンお嬢様は、独りを望まれている…。

出て行くと、命じられたならば。その通りに、しなくてはならない。

たとえ私が、お傍にいたいと願っても。お嬢様が、それを望まれないなら。

静かにドアを閉め、私はため息を吐く。無性に、悲しかった。
「…旦那様」

何処か遠い地におられる、敬愛する主人に思いを馳せる。
あの方なら、お嬢様のお心を癒すこともできたのに、と…。

仕方のないことだと、わかつている。あの方は、ご多忙なのだ。

『カノンを、頼んだぞ。無気力で無表情で無感情だと思っつかもしれないが、そんなことはないからな』

五年前。屋敷を出て行かれたきり、旦那様は戻られない。

…最初は、旦那様の為だった。ご命令だから、お嬢様のお傍にいた。嫌では決してなかったけれど、本音を言えば旦那様に付いて行きたかった。

それが、いつしか変わった。お嬢様の、お傍にいたいと切望するようになった。

「…お嬢様」

ドアの向こう側で、あなたは泣いているのですか？そうだとしても、私は…。

ここから、動くことができないのです。あなたの、ご命令がない限り。

「娘よ！吾輩は貴様を気に入ったぞ！」

目を細め、穏やかに私を見るレックウザ。昨日の敵意はどこへいったのか。

「…ありがとう」

屋敷は、ジョウト地方の孤島にある。孤島といってもそれなりの大きさで、山もあるし湖もある。

パパの、所有地だ。住んでいるのは、元からこの島に生息していた野生ポケモンと、屋敷の使用人さん達だけ。

「…薄い反応だ。もっと喜べ！」

私の反応が不満だったらしく、レックウザは低く唸った。

「それでも、喜んでいるのよ？」

屋敷の裏山。少しひらけた場所で、私とレックウザは向き合っている。時折木々が揺れるのは、珍しい訪問者を見物しに来た野生ポケモンがいるのだろう。

「…そうか？ならばよい！」

尊大な態度で言っていると、レックウザは私の目の前に下りてきた。

見上げていると首が疲れるので、正直ありがたかった。

「…娘、昨日の発言を撤回しよう。…すまなかったな」

…何故、私が謝られているのか。謝ろうと、思ったのに。

「レックウザが、私を空っぽって言ったこと？…その通りだから、謝ることなんてないわ」

そう言つと、レックウザはぐるぐる…と唸った。どこか、悔しげに。

「わからないのか、娘？吾輩が間違っていた。貴様は、虚ろなどではない。…虚ろな者に、あのような目はできぬ」

どうして、わからぬのか…。どうやら、私がレックウザの言う事を理解できないのが悔しいらしい。

「吾輩の一撃を避け、単身吾輩に向かってきた貴様の目は、生き生きと輝いておつたぞ？…吾輩は、貴様の目に魅せられたのだ！」

じいっと、至近距離で見つめられる。…そんなことを、言われても。

「…吾輩の身体に近い、あの空のように澄んだ翠の瞳…あのとときの貴様の目は、美しかったぞ？あの子を見たのが吾輩だけというのは、何とも嬉しいことだな！」

言葉通り、レックウザは嬉しそうだった。地表から数メートル浮かび上がって、長い巨体をくねらせ飛行する。

木々に囲まれた、空。天空の化身と呼ばれるレックウザには、狭すぎるだろう。

「…こちらこそ、ごめんなさい。私達親子の都合に付き合わせて…痛かったわよね」

身体も、心も。傷付いただろうに。

「そのようなこと、伝説と呼ばれし吾輩達には日常だ。…娘が気にすることではないよ」

飛行を止め、優しい目で、レックウザは言う。

「…遙かな昔から、吾輩の強大な力を欲する人間と、戦い続けてきた…。だが、あの男は違った。あの男が望んだのは、『吾輩と、娘がトモダチになる』こと…」

あの男とは、パパのこと。

「初めて貴様を見た時は、冗談ではないと思ったが…今では、悪くないと思っておる」

首を振る。それでは、ダメだ。

「私には、あなたという資格はない…私には…」
俯いた私に、

「な、泣くなよ!？」

慌てたレックウザが、声をかける。

「資格など、必要なろう!？吾輩が勝手に貴様の傍に言ったのだ!…だから、その…難しく考えるな!これだから人間は…!」
わたわたと忙しなく飛び回るレックウザの影が、地面に映る。

「…泣いて、ないわよ…。レックウザ、ありがとう」

顔を、上げる。こんな私を、慰めようとしてくれるレックウザの気持ち、嬉しかった。

「…何だ。娘、そんな風に笑えるのではないか」
にっと、レックウザが笑った…。

気に入った！（後書き）

ポケモンは道具ではない！…そうであるかはトレーナー次第だと思います。対等？そんなのありえないというのも、また一つの考えです。

ポケモンとはこういう存在であるというのは、トレーナー自身を考え、決めることだと思います。悪だの善だの、そんなものは幻想にすぎません。絶対なる悪も、絶対なる善も、存在しないのです。それが、私の考えです。

読んで下さった方、ありがとうございました！

狙いくる者（前書き）

初めて買ってもらったポケモンは、金・銀でした…。赤・青・緑は姉の世代です。私は金、妹は銀を買ってもらい、仲よく遊びました。…懐かしいです。

しかしです。それ以降の作品もプレイし、さまざまなかポケモンを育ててきたまどろみ猫も、どんな技を覚えるかはうる覚えです。そのため、一番末の妹が持っている攻略本に頼ろうとしていたのですが…売り払われていました。

だから、今日買ってきました！ポケモンの図鑑、見ているだけで楽しいです！

狙いくる者

「娘よ、名は、何と言うのだ？」

吾輩は、この変わった娘に名を尋ねた。まさか、吾輩が人間に興味を持つ日が来ようとは…。

「カノンよ。レックウザに、名前はあなの？」

吾輩の名…そんなものはない。一匹で生きる吾輩には、必要なかったのだ。

「ない。…カノンよ、貴様が吾輩の名を付けよ」

この娘なら、名付けられてもよい気がする…。

「いいの？…うん…」

しばし、真剣な顔で考え込む娘。今更ながらに気が付いたが、この娘、なかなか可愛い顔をしている。

やけに必死になって娘を守ろうとしていたあの男。名は確か…ラスタと言ったか？…ほほう。そういうのも、面白いやもしれぬな。などと考えていると、

「レッシー！レッシーでどうかしら！？」

娘…カノンが、昨日とは違う輝きに満ちた瞳を、吾輩に向けた。

…レッシー？

がぱつと、顎が外れそうになる。…開いた口が塞がらないとは、正にこのこと。

「…すまぬ。レッシーだけは勘弁してくれ…！」

純真な瞳から目を逸らし、吾輩は嘆願する。レッシーだけは、何としても回避しなくては！

「…気に入らなかつた？レックウザ…」

しょぼんと、落ち込むカノン。一生懸命考えてくれたのだろう。罪悪感がすぎすぎと痛んだが、それでも！

「…すまぬな」

レッシーは、レッシーだけは！

「わかった…。ごめんね、レックウザ」

頂垂れるカノン。どうすればよいのか…話題を、変えればよいか！？

「そうか、それだ！…ナイス、吾輩！」

「そ、そうだ！カノン、あのラストという男はどうした？」

「…ラストは、パパからお屋敷の管理も任されているから、忙しいの…」

無表情の中に、どこか寂しさを漂わせ、カノンは言った。

「…ラスト、本当はパパに付いて行きたかったの。昨日、レックウザが言った通り」

…地雷だったようだ。昨日の吾輩を、全力で殴りたくなった。

いかん！ますます沈んでいる！

ええい！引き揚げられるか！？

「…そうか？吾輩には、あの男がカノンのことしか考えておらんように見えたぞ。あそこまで必死になるのだ、もっと己に自信を持って」

「自信…？でも、私には…」

…そこまで、自身を卑下することもあるまい。

「安心しろ。カノンは欠けたりしていない。…ただ少し、心に鈍いだけだ」

実際、そうだと吾輩は思っている。この娘には、ちゃんと『感情』がある。

「…そう、なのかな…」

戸惑うカノンに、力強く頷いてみせる。

「そうだとも！…そうだな、吾輩と旅に出てみないか？世界は広い、色々な人やポケモンと出会えるぞ？」

天を仰ぐ。晴れ渡った空は、どこまでも広い。

「カノンは、空虚ではない。…旅をすることによって、それを知らるだろう」

辛いことも、楽しいことも、悲しいことも、嬉しいことも…もっと、味わうべきなのだ。

「旅…旅すれば、私は…」

カノンも、空を仰いだ。囁きが、吾輩にも聞こえた。

「…変わる、かしら…？」

「変われるとも。そう願えば、行動すれば」

ほとんど思いつきだったが、なかなかいい案ではないか？カノンも、元気になったようだし。

…流石だな、吾輩！

得意になっていると、そっとあたたかいものが、吾輩の背を撫でた。何だ？

「…ありがとう、レックウザ。私と一緒に、旅に出てくれる？」

あたたかいものは、カノンの小さな手で。遠慮がちな、微笑みを浮かべて。

…まったく、変わった娘だ。

「よかるう。吾輩とカノンは『トモダチ』だからな！」

以前の吾輩ならば、そんなことは欠片も思わなかっただろうに。今では、そうありたいとまで思っているのだから。

「…レックウザ、発見！捕獲作戦開始！」

穏やかな空気を乱したのは、人間。

「…飛ぶぞ、カノン！」

「きゃ！？」

本能で危険を感じ、カノンを掴んで上空へと逃れる。手の中のカノンを潰さないよう気を付けながら、地表に目をやる。

先程まで、吾輩達が立っていた場所に『れいとうビーム』が放たれていた。

直感に従っていなければ、直撃だっただろう。

「レックウザ？急に、どうしたの？」

手の中のカノンが、事態をわからず尋ねてくる。

「…敵だ。吾輩を、捕らえようとしている」

答えた声が固くなったのは、カノンの存在を再認識したからだ。

…このままでは、応戦できない。

「連続で『れいとうビーム』と『10万ボルト』だ！絶対当てる！」
考える時間も与えられずに、地表から技が放たれる。躲しながら、吾輩は更に上空を指指そうとして…やめた。

吾輩は、大気圏でも生きられる。しかし、カノンは何？人間の身が、上昇して耐えられるのか？

…わからないなら、すべきではない。そう判断し、回避を続ける。

「…飛行部隊！その娘を狙え！トレーナーだ！」

敵の怒鳴り声。…飛行部隊だと！？

首を巡らすと、こちらに向かってくる無数の黒い影。

「…ゴルバットだわ」

流石の我輩も、カノンに目を向ける余裕はない。地上からの技と大量のゴルバットの『エアカッター』を回避しつつ、この状況を打破する方法を考える。

どうすればよいのか。今は何とか躲せているが、いずれ当たる。だが、反撃しようにもカノンが手の中にいる。…戦いにくいし、危険だ。

逃げ出そうにも、すでにゴルバットの群れに囲まれている。強行突破も考えたが、それもカノンのことを考えると…。

「…レックウザ、私に考えがあるのだけれど…」

八方塞の我輩に、遠慮がちに声をかけるカノン。

「考え！？どのような考えだ！？」

ますます激しくなる攻撃。手を講じなくてはと焦る吾輩に、カノンが提案する。

「…駄目だ！危険すぎる！」

しかしそれは、『吾輩』ではなく『カノン』が危険にさらされる作戦だった。

「ぐっ！？」

「レックウザ！？」

気が逸れ、不覚にも一撃もらってしまった。不幸中の幸い、『れ

いとうビーム』ではなかったが。

「お！当たったぞ！もつと当てて弱らせる！」

オニドリルに乗り、ゴルバット達を指揮する男が言う。…調子にのりおつて！

「…でも、このままじゃレックウザが…！私のことなら、気にしないで！」

必死に、カノンが言いすぎる。自身より、吾輩の身を優先するとは…。

こんな状況にも関わらず、笑みが浮かぶ。…尾に、痛みが走ったが、大して気にならない。

「…わかった…良いのだな、カノン？」

手の中の娘。その目に恐れの色はなく、吾輩が魅せられた煌めきがあった。

「ええ！…いくわよ！」

頷き、カノンは紫色のボールを、吾輩へと向けた…。

狙いくる者（後書き）

お読みくださり、ありがとうございます！今回はレックウザ視点です。彼（伝説のポケモンであるレックウザに性別はありませんが、オスっぽいので彼と呼びます）は、今まで見てきた人間とは違うカノンお嬢様に、自分でもよくわからない感情を抱いています。…なにやら、誤解を招きそうな表現ですが、これからカノンお嬢様とレックウザは絆を深めていくのです。

レッシー…可愛い名前だと思つのですがねえ…？

構想はあらかたできているのですが、何分時間がなくて…不定期になつてしまふかもしれません。ごめんなさい！

…ペンドラー可愛いですよペンドラー…（ぼそり…）。

…仕方なかるう！』はかいごうせん』、決め技であるう！？（前書き）

…頑張りました！睡眠時間？そんなのどうでもいいのです！書き
たかった！書けた！嬉しいです！

妹に、技を漢字で書かないのかと訊かれました。…ひらがなは『
ださい』そうです。漢字で書くと、だいぶ感じが変わってしまうの
ですよ！だからです！

…仕方なかるう！』はかいこうせん』、決め技であるう！？

私を掴んで飛行していたレックウザを、ボールに戻す。

当然、私は落下する。

しっかりとマスターボールを握り、真つ逆さまに落ちて行く。私達を取り囲んでいたゴルバットが、オニドリルに乗った男性が、驚いているのが見えた。

「気は確かか！？…だがチャンスだ！ゴルバット！マスターボールを回収しろ！」

男性の指示に従い、ゴルバット達が私の手にしたマスターボール目指して降下する。

…そう。『私』目指して『一直線』に。

笑みが、こぼれた。この高さから地面に墜落すれば、命はない。けれど、それでも私は、笑っていた。

地上からの攻撃は止んでいる。何もせずに、ゴルバット達がレックウザをゲットするのを待っているのだろう。

風を切り、重力に従う身体。腕を少し動かすのも大変だった。

「…レックウザ！お願い！」

何とか腕を真上に向け、ボールの開閉スイッチを押す。

「任せよカノン！…くらえ！」

現れた、巨大なドラゴンポケモン。大きな口を開いて、吼える。

「しまった！？散れ、ゴルバット！」

男性が指示するも、時すでに遅し。

レックウザの口に集束した光線が、一直線に降下していたゴルバット達を消し飛ばす。

「…『はかいこうせん』」

圧倒的なまでの威力。一掃されたゴルバット達。それは計算通りだったけれど。

「…反動で、動けなくなるのよね…」

現在も落下している私。固まったレックウザが遠のいていく。もうすぐ、地面に激突する。…恐怖は、ないけれど。ラスタ…私のこと、忘れちゃうのかな…。レックウザは、空虚じゃないって言ってくれた。それなら…残れば、いい。彼の中に、少しでも。私が…どこまでも、身勝手ね。目を閉じる。最後に見られたのは、雲一つない空と、焦げて落ちて行くゴルバットと、…レックウザ。私の、初めての『トモダチ』…。

「カノン！」

…レックウザ？

ふわりと、優しいものに包まれる。落下が、止まる。

鮮やかな緑が、目に入った。

「…間に合ったか！胆を冷やしたぞ！」

「あれ？…レックウザ？」

私は、レックウザの手の中にいた。…助かった、ようだ。

下を見ると、地面まで数メートル。

「ゴルバット共は倒したぞ！待っておれ、残ったあやつらを…お？」

レックウザが、驚きの声を上げた。何だろうと首を巡らせると…。

鬼が、いた。

「…あやつら…哀れな…」

遠い目をして、レックウザが呟く。そっと、私を地上に下ろして

くれた。

「…ラスタ…！」

鬼が、にっこりと笑う。

「お嬢様、…お姿が見えないと思えば…」

立ち上る怒気。顔は笑っているが、目が笑っていない。

「お説教は後です。…この不法侵入者二人を、ジュンサーさんに突き出してからたっぷりとして差し上げます」

ルージユラとエレブーを従えた男性と、オニドリルに乗った男性。「ど、どうする!?!」

「…何かヤバそうだ!逃げろぞ!」

怒るラスタに逃げ腰となった二人を、

「逃がしません」

軽く放られた、三つのモンスターボール。フシギバナ、カメツクス、リザードンが、二人と三匹のポケモンを睨み据える。

加えて、こちらにはレックウザもいる。男性達の顔から、血の気が引いていく。

「さあ…お仕置きの間ですよ?」

爽やかに、ラスタが言った。

男性達の悲鳴は、島中に響き渡ったという…。

「…どうして、私に声をかけてくださらなかったのですか?」

抑えた声でそう言うラスタは、私を見ていない。

「…昨日、レックウザをボールに戻せたのは、運がよかったからです。そんなこともわからないお嬢様ではないでしょう?」

ぼろ雑巾と化した男性二人と、戦闘不能となった三匹のポケモンをジュンサーさんに突き出し、ラスタのお説教が始まった。

相当怒っている。見上げているのに、目も合わせてくれない。

レックウザは、神妙な顔で私達を見守っている。…遠い。

「わかっていただけ?…でも、ラスタは忙しいでしょう?邪魔しちゃいけないと思つて…」

「そんな気遣いは無用です!」

私の言葉を遮り、ラスタが怒鳴る。

「お嬢様は、わかっていらっしやらない!私はお嬢様をお守りするためにいるのです!それなのに、私に黙って屋敷を抜け出して、あんな危険な真似をして!…レックウザが間に合ったから良かったものの、一歩間違えば死んでいたのですよ!?!」

「いや、それはカノンが悪いのではない!カノンは『りゅうのはど

う』がよいと言ったのに、吾輩が『はかいこうせん』を…」

私をフォローしようとしたレックウザだったが、

「レックウザは引っ込んでいてください！」

ラストのものすごい剣幕に、ぐっと唸って引き下がる。

「…ごめんなさい。私に何かあれば、ラストがパパに怒られてしま
うわね」

考えていなかった。ラストは、私の面倒も任されていたのに。

「…違う！」

「!？」

激昂したラストに、肩を掴まれた。…痛い。

「違う！そうではないのです!!…私は！」

肩に、ラストの指が食い込む。痛い。

「私は！お嬢様をお守りしたいのです！お嬢様の、その自分の身を
顧みない行動が、どれだけ私の心を抉るか知っていますか!?!…旦那
様は、関係ありません！私は、私の意思でお嬢様をお守りしたい
のです！」

理解できない。パパを抜きにして、どうしてラストが私を守ろう
とするのか。

「…わからないわよ…!…なんで!?!…どうして!?!」

ますます力のこもる指が痛い。怒鳴るラストが怖い。

上空から落下するよりも、ずっと。

「…わから、ないわよ…!」

目頭が、熱くなった。何かが、溢れてくる。

「!?!ラスト！カノンを泣かせたな!?!」

レックウザが吼える。…泣いている？私が？

ラストが、狼狽する。肩にこもっていた力が、抜けた。

「…カ、カノンお嬢様!?!」

おろおると、ラストが覗きこんでくる。

「…ラスト、私、泣いているの？」

目元を触ると…濡れて、いる。

「はい！…お嬢様が泣かれるところなど、はじめて見ました！」
微笑むラスト。どこか、嬉しそうだ。

「…どうして、嬉しそうなの？」

ついさっきまで、あんなに怒っていたのに。

「お嬢様が、ご自分の感情を露わされたからですよ！…申し訳ありません、痛かったでしょう？」

「…痛かったけど…いいの。ラストが、笑ってくれたから」

心配をかけてしまった。そこまで、私のことを思っていてくれたなんて、知らなかった。

「…っ！ありがとうございます…！」

…あれ？ラストの顔、ちよつと赤い…？

…熱でも、あるのだろうか…？

…仕方なからう！』はかいこうせん』、決め技であるう！？（後書き）

『はかいこうせん』！？アニメで観るとかつこいいですよね。

…時間ないです。仕事行かなくては…。仕事中に、アイデアが湧くこともあるので、頑張りたいです。…『人』を見たくは、ないのですがね。

…ご覧になって下さった方、ありがとうございました！

旅立ち（前書き）

ポケモンの夢をみました、まどろみ猫です！ゲームでは技の効果とか能力値とか戦っている最中でも見れますが、現実では（夢ですが）そんな暇はありません。ですが、何より困るのは…ボールに入っているポケモンがわからないということです！アニメでも、なんかわかるのでしょうか！？

やっとお嬢様の旅立ちです！あ、アニメでは十歳で旅立ちですが、この小説では年齢制限なしです。でも正直、十歳で旅立ちなんて危険すぎだと思います。

…さようなら、ラスト！キミにもまたいつか、出番はある！

旅立ち

「旅に出たいの」

そうおっしゃったカノンお嬢様。その頬を伝っていた涙を指で拭い、私は笑った。

乱れる心。悟られぬように。

お嬢様が私のことを、気に掛けてしまわれないように。

「そうですか。わかりました、旦那様には私からお伝えしておきま
すね」

…いつか、こんな日が来るとわかっていた。来ないでほしいと、願っていた。

だけど、お嬢様が望まれるのなら…私は、見送ろう。

笑顔で。お嬢様の、ご無事と成長を願って。

「…あの状況で『はかいこうせん』はダメだろう。ちょっと考えればわかるだろう？」

むう。ラストのフシギバナが、咎めるような目で吾輩を見ってくる。

「うん。フシギバナの言う通りだ。…レックウザ、どうして『はかいこうせん』を？」

カメックスも、リザードンまで。

「…仕方なからう！『はかいこうせん』、決め技であろう！？」

こちらを目掛けて降下してくるゴルバットの群れ。気分が高揚して、気が付いたら『はかいこうせん』発射していた。

「「「……………」」」

三匹とも、呆れてものも言えないといった様子だ。…は、反省しておるから、そんな目で見るな！

「…なあレックウザ…ラスト、お嬢様のこと大好きだからさ…頼むぞ、ほんと」

…視線が痛い。

「でも、お嬢様この島から出てっちゃうんだよなあ…ラスタ、大丈夫だろうか？」

カメックスの視線が、少し離れたところで話している二人に向けられる。よし、気が逸れた。

「そうだよなあ…。屋敷なんてほつといて、二人で旅すればいいのにな」

フシギバナも。

「ああ…。どこの馬の骨かもわからない男に、世間知らずなお嬢様が騙されたら、ラスタがどうするか想像するだけで怖い」

ぶるつと、身震いするリザードン。…何を想像したのか。

「ラスタも、自覚がないのがまずいんだよなあ…」

「仕事一筋に見えて、お嬢様一筋なんだよなあ…自覚してないけど」

…何だ。本人たちよりも、ポケモンのほうがよく見ているではないか。

「…いや待てよ！？離れて自覚するかもしれないぞ!？」

リザードンの言葉に、

「おお！あるかもしれないな！」

「それで、追っかけたりするかもな!？」

盛り上がり始める三匹。…何としても、あの二人にくつついてもらいたいらしい。

会話の末、『このままでは進展しないから、一度離れてお嬢様の存在の大きさを自覚させよう』という方針になった。

「…カノンが旅している内に、出会った男を好きになったらどうするのだ?」

吾輩の疑問は…黙殺された。ひどいぞ！

ラスタは、反対しなかった。わかりましたと、笑ってくれた。

猛反対を予想していた私は、拍子抜けした。…少し、がっかりもしていた。

「行かないください」

そう、引きとめて欲しかったのかもしれない。このままの私でも、傍にいていいのだと…。

ふるふると、首を振る。何を考えているのか。そんなことを期待されても、ラストだって困るだろう。

明日、屋敷を旅立つ。…ラストとは、当分会えない。

そこに思い至って、胸の奥が疼いた。住み慣れたお屋敷を、豊かな自然のこの島を離れることよりも、それが辛い。

そう、『辛い』。…私にも、感情はあったのだ。

ソファに座り、ぎゅっとぬいぐるみを抱きしめる。古いけれど、メイドさんが洗濯してくれるから汚くはない。

ピカチュウの、ぬいぐるみ。十歳の誕生日に、ラストがくれたもの。連れて行くわけには、いけないから。

今、抱きしめておかないと。

机の上に置かれた、ショルダーバックとベルト。ベルトにはすでに、マスターボールがセットされている。

…私、頑張るから。今までずっと、ラストやメイドさん達に何でもしてもらっていたけど、全部自分の力でやるから。

失敗するだろうけど、挫けないから。…辛いことがあっても、逃げ帰ったりしないから。

だから…私を、たまにでいいから思い出してね？

いつもより、二時間も早く目が覚めた。ベッドで何度も寝返りを打つも、眠れそうになかったので起きる。

自分でカーテンを開けると、群青色の空に金色の星が数個、瞬いていた。まだ、陽は昇っていない。

空を、眺める。…じっと、陽が昇るまで。

今日も、晴れるだろうなと思いながら。

「…ワカバタウンの、ウツギ博士？ポケモン進化の権威である、ウツギ博士？」

この島は、ジヨウト地方の隅に位置している。一番近い町は、タウンバシティだ。

私は水ポケモンを持っていないので、レックウザに乗せて行ってもらおうとしていた。大きな背中に乗せてもらい、行先を告げようとした私に、ラストは封筒を差し出してこう言ってきた。

「お嬢様。…ワカバタウンのウツギ博士に、この封筒を…」

届ける、ということだろう。受け取った封筒は薄く、陽に透かすと紙が一枚入っていた。

「手紙？…古風ね」

パソコンやポケギアなど、電子連絡のほうがるかに早い。屋敷にもあるし、研究者であるウツギ博士だってパソコンを所持しているだろうに。

「旦那様が、わざわざポケモンに持たせて転送されてきたのです。ご友人のウツギ博士に、お嬢様の手で届けてほしい、と…」

苦虫を噛み潰したようなラスト。敬愛するパパの指示なのに、不満があるようだ。

「お嬢様、お疲れになったら無理せず休んでくださいね？この島からワカバタウンまでは距離があります。レックウザなら大した距離ではないでしょうが…」

「ふん、当たり前だ！」

レックウザが、得意げに言う。早く飛び立ちたい様子だ。

「調子にのって、スピードを出してはいけませんよ？それから…」

その様子に、ますます心配になったらしいラスト。ここらへんで止めないと、延々と続いてしまう。

見送ってくれるメイドさんや庭師さん、コックさんが、複雑な顔をしてラストを見ていた。

「大丈夫よ、ラスト。無理はしないから。…じゃあ、いつてきます」
軽く手を振る。メイドさんたちが、一斉に頭を下げた。

「…いつてらっしゃいませ、お嬢様」「」

初老の庭師さんとコックさんが、笑顔で手を振りかえしてくれる。

「気をつけてな〜お嬢！」

「お帰り、お待ちしています！」

…あれ？何だろう、この気持ち？

みんなを見てみると、行きたくないような…。

「…うん。ありがとうみんな」

これが、『別れ』の痛みなのだろうか。旅に出る前に、新しい『思い』を知ることができた。

頃合いかと、レックウザの巨体が浮き上がる。…いよいよ、出発だ。

「…っカノンお嬢様！少し、お待ちください！」

ラストが、駆け寄ってきた。

「貴様、いい加減に…！」

怒り出そうとしたレックウザだったが、制止してきたラストが持つものを見て口をつぐんだ。

リボン。ライトグリーンの、リボンだった。

「失礼しますお嬢様。すぐ、すみすから！」

レックウザの背中に、身軽に跳び乗ったラスト。私の後ろに回る。

…突然髪を触られて、驚いた。

「きゃあ〜！」

「…おお！」

何やら、黄色い声が聞こえてきた。…どうやら、ラストは私の髪をまとめてくれたようだ。

「…似合っておるぞカノン。カノンの瞳と同じ色の布が、黒い髪によく映えるな」

レックウザが、褒めてくれた。メイドさん達も、

「お嬢様、お似合いです！」

「可愛いですよ〜！」

口々に、褒めてくれる。…なんだか、こそばゆい。

このリボンはきつと、旅立つ私への饞別だろう。腰までとどく髪は邪魔になるかなと思いはじめていたけれど、これで大丈夫だ。

「ラスト、ありが…!?!」

お礼をと、振り返りかけた私。後ろに立つラストに、阻まれた。首に回されたラストの腕。背中に感じる体温。

少し遅れて、脳が状況を理解した。…ラストに、後ろから抱きしめられている。

「……つきやあああああああああああ!?!?!?!」

悲鳴に近い歓声が響く。レックウザが、絶句している。

「…カノンお嬢様、私の顔を見ないでください。見ないまま、旅に出てください」

耳元で、そう囁かれる。…何で? どうして? と、訊きたいのに。

「…わかったわ。ラスト、リボンありがとう」

あなたの顔を見て、お別れを言いたいの。

「いってきます。元気でね」

私は、訊かなかった。言わなかった。

「こちらこそ…ありがとうございます。お気を付けて」

そっと、ラストが離れる。…温もりと、一緒に。

「よし! 行くぞ、カノン!」

レックウザの声とともに、地上が遠のく。

「お嬢様〜!」

「頑張ってください〜!」

メイドさん達の声が遠い。どんどん、離れていく。

「…みんな! またね!」

地上に向けて、声を張り上げる。聞こえただろうか?

感じる、風。天高く、舞い上がる。

…出発だ。

旅立ち（後書き）

：ゲームでのライバル（ジヨウト地方の、赤毛の彼です）は、ツンデレだと思えます。思う、じゃなくて確信しております。ああ早く彼を登場させたい…！

今日は、人物設定を書いておりました。公開はしませんが、各々の手持ちポケモンを決めました。できるだけジヨウト地方のポケモンです。伝説ポケモンはなしの方向で！

お付き合いくださった方、ありがとうございます！駆け足展開、申し訳ございません！

私、実はポニーテール萌えなのです…冗談ですよ（前書き）

サブタイトルは、完全な悪ふざけです。あのラストさんに、言わせてみたかったです！

今回は、メイドさんが登場します。あのお屋敷のメイドさんはかわいかったり美人だったりで「あれ？ここなんてハーレム？」という感じなのですが。残念なことにみんなどこかぶっ飛んでいます。今回以降『メイド』という単語が出てきたら注意してお読みください。…淑やかな癒しなんて、彼女たちにはありません。

私、実はポニーテール萌えなのです…冗談ですよ

レックウザの巨体が徐々に小さくなっていく…。天高く浮かび上がったレックウザは、一度旋回すると飛び去っていった。

…いつてらっしやいませ、お嬢様…。

お見送りは、『笑って』できなかつた。どうしても、笑えなかつた。

「…寂しくなりますね、ラストさん」

右頬に、大きな傷跡があるメイドのリア。彼女は私の横に並び、報告する。

「島の南西に、船が接岸しようとしています…私、片づけてきましようか？」

青空を見上げていた彼女の目が、危険な輝きを帯びる。

「侵入者！？…空気読めないわね！」

「昨日の奴らの仲間でしょうか？」

ざわめく彼女達を、手振りで鎮める。このタイミングで侵入とは、確かに空気を読めていない。

「許可を得ずこの島に侵入した者は排除しろ…旦那様の御命令です。リア、一応確認しておきますが、その船は漁船や漂流船、何も知らない民間の船ではありませんか？」

侵入者探知・撃退担当兼メイドのリアは、首を左右に振る。普段は見せることのない好戦的な色を、隠そうともせず。

「…そうですね。では、リアと数名で迎撃してください。リアがいれば大丈夫でしょうが、何かあれば連絡を。他の者はお屋敷で待機です」

「…はい！」「」

私の指示に応え、各自持ち場へと移動する。私も、お嬢様のお傍に…。

「ラストさん。お嬢様ならついさっき、旅立たれたじゃないですか」

…そうだった。

「あ、やっぱりお嬢様のお部屋へ行かれようとしていたんですね」
呆れた顔のリア。四人のメイドも、苦笑している。

「…ええ。それが、私の役目でしたから」

バツが悪い。いつも、そうしていたものだから。

「ラストさんは、最高責任者。私達使用人のリーダーですが、たまには暴れてみませんか？」

しゅるるる…器用にモンスターボールを指先で回して、リアは微笑む。

「最高ですよ…勘違いした連中をぶちのめすのは!」

「…私、ポニーテールよりツインテールのほうが、お嬢様に似合うと思うのですけど!」

リアが叫ぶと、

「待つてくくださいリアさん!三つ編みも捨てがたいと思います!」

「何言ってるの!?!右サイドで一つ結びでしょ!」

「いえ!左サイドよ!」

「何でもお似合いになれるわよ、お嬢様なら!」

メイド達の間で、論争が巻き起こる。

「…な、何言ってるんだこいつら?」

言い争っているメイド達に、呆気にとられている侵入者達。島には上陸していないが、海上でも旦那様の所有地だ。

「…はあ。気にしないでください!」

ため息が出る。…敵船の中で、もめてどうするのですか。

「…あなた方がこの島にやってきた理由をお聞きしたいのですが…
なんだか疲れてしまったので、捕まえた後でゆっくり訊かせてもらいますね」

ぎゃーぎゃー騒がしい彼女達を視界から消して、モンスターボールを投げる。

「ニドキング!久しぶりに、思う存分暴れなさい!」

「…どうだカノン！広いだろう、世界は！」

飛行するレックウザ。その背中から見える世界は、果てなく続いていて。

「…そうね！海って、こんなにも青いのね！知らなかったわ！」

日光を反射してきらきら輝く水面。青い海にところどころ浮かんでいる、島の緑や灰色。

「うむ！空の青さとはまた違うな！…さっそく一つ、知ることができたなカノン！」

満面の笑みを浮かべるレックウザと、頷く私。

「うん！…一緒に頑張りましょうね、レックウザ！」

「無論だ！…よし、飛ばすぞ！」

快活に答えて、レックウザはスピードを上げた…。

「誰に口を利いているの？…身の程を弁えなさい！」

手足を縛られ、床に転がされた男。情報収集・尋問担当兼メイドのカコは、容赦なく男を踏みつける。

「あぁっ！…申し訳ありませんカコ様あゝ！」

身もだえする男。…視線を逸らしてもよいでしょうか。

「ふん…！これくらいで悦ぶなんて、つまらない男ね！」

ぐりぐりと、何時の間にか履き替えていたピンヒールで男を踏みつけるカコ。言葉と裏腹に、相当愉しそうだ。

「あああああああ…！もつと踏んでくださいー！！！」

頬を染め、カコに踏んでもらうことが至上の悦びだと言わんばかりの男。…目覚めてしまったようだ。

「さあ！踏んでほしかったら、ラストさんの質問にちゃっちやと答えなさいこの豚が！」

げしつと男を蹴りつけるカコ。

こら口が悪いですよとか何で痛がらずに悦んでいるのですかとか、ツッコむべきところは色々あった。それはもう、色々。

「…カコ、後はあなたに任せます」

だが、私は限界だった。一刻も早く、この場から立ち去りたい。そして、何も見なかったことにしたい。

「えっ!?!」

「訊きだすべきことはわかっているでしょう?…任せますから、後は好きにしてください」

丸投げだ。問題はないことも…ない。

「…お任せください!…悦びなさい!あんたみたいな豚が、この私に相手してもらえないことにね!」

「カコ様あああ!」

ばたんと、ドアを閉める。

「…忘れましょう。白昼夢。あれは白昼夢だったのです」

自分に言い聞かせる。悪夢を見ていたのだと。

あんなものを見たせい、無性にお嬢様にお会いしたくなった。廊下の窓。よく磨かれたガラス越しに空を見て、お嬢様を想う。

「あああああああ!…もっと!もっと激しくお願いします

!」

「…この豚が!豚の分際で、生意気よ!」

聞こえてきた、嘆願と罵声。

…癒しが欲しいです。切実に。

「ジョウトリーグよりウツギ博士へ…初心者用ポケモン三体、近日中にそちらへ届く、か…」

科学とは、便利だ。だが、危険もある。

「…待っていた…!」

そう、俺のようなやつに『悪用』される危険が…。

「あ。父さん、メールが来てるよ」

パソコンのデスクトップに表示された、『メールが来ています』の文字とアイコン。

「ん〜?ごめんヒビキ、ちょっと手が離せないから、読み上げてくれるかい?」

父さんは、ごそごそと引き出しの中をかき回していた。…いつも言ってるけど、ちゃんと整頓しようよ。

「うん。え〜と…差出人はジョウトリーグで、内容は…要請のあった初心者用ポケモン三体、近日中にそちらへ届きます。新たなポケモントレーナーの誕生に…ってええええ!?!」

僕はメールを読みかけて、叫んだ。

「うわあ!?!どうしたんだい、ヒビキ!?!」

驚く父さん。眼鏡がずれてるよ。

「…コトネちゃんに、知らせてくるよ!」

研究所を飛び出す。大好きなあの子の驚く顔を想像しながら。僕達、やっとならぬポケモントレーナーになれるんだよ!

大好き。大好き大好き大好き!

世界中で、ヒビキくんのことが一番好き!いつでも一緒にいたいのに、今日はお父さんであるウツギ博士のお手伝いがあるから、遊べないんだって…。

「はあ…会いたいよお…」

ファッシュン誌を放り投げて、ベッドに転がる。すると、

「コトネちゃん!」

ドアが開いて、ヒビキくんが来てくれた!

「ヒビキくん!?!…今日もかつこいいね!?!」

「わっ!?!」

感動したよ〜!会いたいと思ってたら、お手伝いほっぽりだしてヒビキくんの方から来てくれるんだもん!

嬉しくて抱きついたら、赤い顔してあわあわ言ってる…かわいい!

「コトネの思いが通じたんだね!ヒビキくん大好き〜!?!」

「コ、コトネちゃん…首、締まって、る…」

赤から青に変わっていくヒビキくんの顔色。ぱっと手を離すと、

苦しそうに咳き込んだ。

「ごめんごめん！大丈夫？」

訊くと、

「うん…大丈夫。優しいね、コトネちゃんは…」

喉を押さえて、笑うヒビキくん。

…王子様がいるよお！！かつこよくて優しくてかわいいなんて、完璧だよ！！

「優しいなんて…！ヒビキくんのほうがずっと優しいよ！」

「そ、そうかな…？」

照れて笑うヒビキくん…もう！

どれだけ私をときめかせれば気が済むの！？

私、実はポニーテール萌えなのです…冗談ですよ（後書き）

…ようやく！ライバルとウツギ博士とヒビキとコトネちゃんが出てきました！…メイドさん？ハハハ、ナンノコトデスカ？

「ラストさん、どうしてポニーテールに？」

「…お嬢様が、ご自分でできる髪型だからです。リアはツインテールがいいと言っていました。難しいでしょう？」

「…嘘だ！絶対嘘だ！ラストさんほんとはポニテ萌え…っにゃああああ！！！」

「ライチュウ！逃がしてはいけませんよ！」

「ライライラア！！！」

「お助けええええええええええ！！！」

お嬢様と、赤い髪の少年（前書き）

9話目とは…展開の遅さときたら！ウツギ博士に会ってすらいな
いとは！言い訳は…無用ですね。付き合ってください方に感謝を！
私見ですが、ジョウトのライバルはイケメンだと思います。ツン
デレなところもたまりません。…最後の、研究所の助手から伝え聞
いたあれには、くはあっ！となりました。…アニメで出なかったの
が悔やまれます。シゲルは出たのになあ…。

お嬢様と、赤い髪の少年

「レックウザ！もう一回お願い！」

背中のカノンが、頼んでくる。首を巡らせて見ると、子供のよう
に楽しそうだった。

「…仕方ないな！振り落とされるなよ！？」

「うん！」

ぎゅっと、吾輩の背中に抱きつくカノン。

「雫もみ急降下からの急上昇！三回転付きだ！」

「きゃ〜！！！」

風を切り、急降下や急上昇を繰り返す。カノンが、喜んでいる。

旅に出て数分で、カノンの意外な一面を知った。吾輩の背中に乗
って、飛行するのが楽しくてしょうがないらしい。

このような危険な飛行も、吾輩なら安心なのだそうだ。まあそう
だろうな！

くっくくと、喉を震わせて笑う。カノンが、不思議そうな顔を
している。

ラストが知ったら、どんな顔をするだろうな？

「…あ！レックウザ、あそこがワカバタウンよ」

タウンマップを手に、カノンが地上を指す。その先を見れば、タ
ウンというにはシテイのような『ワカバタウン』。

今更ながらに、不安になってきた。吾輩はカノンの指示通り飛ん
でいたが、あの島から出たことのないというカノンに、地理がわか
るのか？

「…そうか、では降りよう」

降下する。大きな吾輩には狭いだろうと、民家のない砂浜に着陸
する。

「おお！？お嬢ちゃん、見たことのないポケモンだな！」

海辺で釣りをしている男に、声をかけられた。吾輩は、認めていない人間に話しかけてやる気はないのだ。

そっぽを向いてやる。

「…愛想のないポケモンだなあ、お嬢ちゃん？」

笑って、男は失礼なことを言った。…カノン、がつんと言ってやれ！

「…レックウザ、気位が高くて…気を悪くしたならごめんなさい」
吾輩の背中から下りて、カノンは頭を下げた。長い尾のような髪が揺れる。

「わわっ！？ちょよ、ちょっとお嬢ちゃん、そんな真面目に受け取らないですよ！？…って来た！」

カノンの反応に慌てた男は、どうやら食いついたらしい釣竿に意識を集中させる。

「…っおりゃあ！」

一気に引き上げる。釣れたのは…

「ん？これは…『みずのいし』か」

ポケモンじゃなかったと落胆する男。釣り針に引っかかった、美しい青い石を外す。

男の掌にすっぽりと収まっているその青い石を、カノンは見たいらしく、

「…見てもいい？」

男に近づいてそう訊いた。

「いいよいいよ！…っていうかあげちゃっうよ！」

カノンに『みずのいし』を渡す男。…ほう、気前いいな。

「え？…でも、貴重なものなの？」

遠慮しようとするカノンに、

「いいのいいの！俺のニョロゾは、ニョロボンじゃなくてニョロトノに進化したいんだってさ！」

だからもらってよ！ヨシノシティに来た記念ってことで！

笑顔の男と、無表情なカノン。

その頬が引き攣っているように見えるのは、気のせいではないだろうな。

「まあ！マスターボールね、珍しいわ！」

決して大きな声ではなかったが、ジョーイの言葉は俺の耳に入ってきた。

…マスターボールだと？

預けたポケモンの回復を待っていた俺は、顔を上げる。カウンターの前に立っている女が目に入った。

女といっても、俺と同年代だろう。長い髪を明るい緑色のリボンで結んで、黒を基調としたワンピースと上着。シヨルダーバックは服と逆で、白が基調。

細い腰のベルトには、一つもボールがつけられていない。

…お願いします」

静かな声だった。俺は騒がしい女が大っ嫌いだが、この女は違うらしい。

「はい！少々お待ちくださいね！」

ジョーイの笑顔に頷いて、女は振り返った。

…ふん。美人じゃないか。

たとえていうなら、人形だ。作られたように整っていて、無表情さがますますそう思わせる。

肌は白いし、眼は翡翠色。かわいいというより、美人という形容が似合う女だった。

女は、ソファに座った。雑誌を読むでもなく、誰かと情報を交換するでもなく、ただ座っている。

…マスターボールか。どんなポケモンが入ってるんだろうな。

興味がある。マスターボールの、中身に。

初心者ポケモン三体いたたく前に、そのポケモンももらおうか。

「ねえキミ、どこ出身？」

「…出身？タンバシテイの近くの島よ」

女が、三人の男に絡まれていた。…明らかに、ナンパだ。

「トレーナーだよな？俺達とバトルしない？」

「今、ジョーイさんに預けているから…それに、あまり戦いたくないわ」

「すごいキレイだね」

「ありがとう」

ちやらちやらしている男が三人と、淡々と答える女が一人。

「待ってるの暇でしょ？俺達と遊ぼうよ」

男の一人が、女の肩に手をかけた。

「待っているから、遠慮するわ」

動じることなく、女は誘いを断る。

「…いいじゃん、行こうよ」

別の男が、女の手を引く。

女の細い眉が、ひそまれた。ゆったりとした動作で、手をはらう。

「…行かないわ」

囲まれているのに怯えもせず、女は言った。

「お高くとまってんじゃねえぞ！」

逆上した男に怒鳴られても、顔色一つ変えない。

…言っておくけど、俺は助けないからな。俺以外のやつらも、見て見ぬふりしてるぜ。

手元にポケモンはなし。どうするつもりなのか。

他のトレーナーは、目を逸らしている。女が目で救いを求めてきても、自分がそれに気付かないために。自分の『良心』とやらが、痛まないために。

…馬鹿馬鹿しい。それなら何で、今助けないんだ？

俺だけが、女を見ている。あの女がどうなるうが俺には関係ないし、痛む『良心』なんて持ち合わせてはいない。

無表情な女は、こちらを見はしなかった。かといって、男達を見ているわけでもない。宝石みたいな緑の目で、どこかを見ていた。

「いいから付き合えよ！ほら！」

「うるせえよ」

怒鳴り散らす男に、蹴りをお見舞いしてやる。そんなに力を込めたわけでもないのに、吹っ飛ぶ男。

「てめえ何しやがる！」

「うるせえって言ってるだろ」

二人目。腹に拳を叩きこんでやる。

「お、おい!？」

「しゃべんな」

気絶した仲間を見た男は、防御することもできずに顔面を蹴られて仲間入り。

…弱いな。集まって強くなった気になってるやつらは、見ているとイライラする。

「…ありがとう。助かったわ」

女が、礼を言ってきた。無感情な緑の目は、目つきの悪い俺を恐れることなく。

「助けたわけじゃない。勘違いするなよ」

突き放すように、俺は言う。面倒な関わり合いはごめんだ。

「…ならなぜ、この人達に関わったの？」

わずかな疑問を浮かべて、女が訊いてくる。

「…むかついたんだよ」

呻き声をあげて転がっている男どもを一瞥して、ポケモンセンター内にいるトレーナーどもも見る。

「こいつらも、見て見ぬふりしようとしていたぞいつらも」

目を逸らすトレーナーども。こいつらも、弱い。

「…そう。とにかく、助かったわ」

静かな女。…変な女だ。

「昼食、まだでしょう?一緒にさせてもらってもいい?」

お礼とってはなんだけど、ごちそうさせてと女は言う。

……おごりなら、いいだろう。

ヨシノシテイは、小さな町だ。田舎で、珍しいものなんて何もない。

「おい！危ないだろうが、しっかり前見てろ！」

しかし、女はふらふらと歩いて行ってしまふ。心なしか、翡翠の瞳を輝かせて。

危なっかしいこと、この上ない。…どうして、ポストを物珍しそうに見ているのか。

「ほら、早く行くぞ！」

この調子では、日が暮れる。女の白い手を引っ張って、俺は喫茶店へと向かった…。

食事は、会話もなく終わった。適当に入った喫茶店だったが、なかなかランチは美味かった。

よし、あとは人気のないところに連れ込んで、マスターボールのポケモンを…。

「デザートは？甘いもの、嫌い？」

頼まないのと、メニューを差し出してくる。

「…嫌いだ。俺はコーヒーでいい」

俺は甘いものが嫌いだ。あそこの席の、人目もはばからずにいちやついてるバカップルがつついている馬鹿でかいパフェなんて、絶対に食いたくない。

「旅に出たら、このお店のパフェも食べれなくなるね…」

なんだ、常連か？

「そうだね…二人でジョウト地方を巡って、帰ってきたらまた食べようよ！二人で！」

大事なことから、二回言ったぞあの彼氏。

「……っ！そうだね！…帰ったら、ここのパフェ食べて、教会に…！」

あの活発そうな女なら、あの真面目そうな彼氏を引き摺ってでも行きそうだな。

「コーヒーね」

ためらいがちに、女がウエートレスに声をかけ、注文する。…バカップルは、もう知らん。

「…お前、『お嬢様』だろ？まさか、一人で旅するつもりじゃないだろうな」

待っている間、気まぐれに訊いてみる。まったく音を立てずに、完璧な作法で食事をしていたこの女は、『お嬢様』だろう。そしてポケモンセンターでポケモンを回復させ、出身は遠方。所持しているポケモンは一体で、あの日常風景ですら珍しげに見ている様子。

マスターボールのポケモンは、飛行タイプだろう。おそらく、タンバからここまで飛んできた。この女が、交通機関を乗り継いでここまで来られるわけがない。

「ええ。見えないだろうけれど、お嬢様よ。今日、旅に出たの」

正直に、答える女。…こういうときは、嘔吐くもんだぜ。

「…無謀だな。恵まれてるお前が、何で旅に出るんだ？家で、お人形みたいな大人しくしてろよ」

相手が、金を持つてる『お嬢様』だろうが関係ない。俺は、おベっかは使わない。

箱入り娘のこの女に、この言い方はさぞきついだろうなと思ったら…

「…そうね。そうだろうけど…」

女は、微笑していた。うっすらとだが、確かに。

「世間を、人の感情を、自分を、知らないから…旅に出て、知ろうとしているの」

…『お嬢様』とは思えない『お嬢様』だな。危険な旅を自分で経験してまで、知りたいことがあるなんてな。

「さっそく、知ることができたわ。…あなたみたいな人、初めてよ」
女が笑った。静かに、嬉しそうに。

「…何だよ。口と目つきが悪いってことか？」

一瞬、動悸がした。自分自身を誤魔化すように、憎まれ口をたた

く。

「悪い？…ううん、そうじゃなくてね…」

…何だ。早く言えよ。

「あ。自分に、正直な人、かな？」

そう思ったのと、真っ直ぐ俺を見てくる女。

…そんなこと言われたのは、『初めて』だ。

お嬢様と、赤い髪の少年（後書き）

ポケモンの小説を書くにあたり、考えさせられたことはたくさんあります。…食料事情どうなってる！？アニメで、ケンタロスが放牧させられていたシーンがあつたけど、まさか…！？とか、ポケモンセンターって税金だよね！？公共施設だよね！？とか、10歳で旅？ないない！いろいろ危険だよ！いろいろ！

深く考えてはいけない。ですが、考えてしまいます…。

…ねえサトシくん…ステーキとか、食べたくならないかい？

番外編 くラストと仲間達く（前書き）

パソコンの調子が悪いので、故障ではないかと恐怖しているまどろみ猫です。混線だと思いたい、信じたい！

今回は番外編です。本編とは関係ありません。…悪ノリと、仕事
が急に入ったのでカツとなってやらかしました。私の小説を書く時
間を返せ！私の幸福の邪魔をするな！…という気分です（笑）

番外編　～ラスタと仲間達～

「…何の騒ぎですか、これは」

大広間。メイド達が忙しなく駆けまわり、パーティーでも開くつもりなのか、部屋を飾りつけている。

「リア、これは一体…っ!？」

指示を出しているリアに尋ねようとすると、彼女の右手が素早く動いて何か飛来してきた。

かんっ!

小気味いい音を立てて、大広間の壁にナイフが突き刺さる。

危ないし、壁に穴が!修繕が!

「心配ないですよ、ラスタさん。このお話は番外で、『何をしても何もなかったことにする』と、まどろみ猫が言っていました!」

「へ!?番外編!?何ですかそれ聞いていませんよ!？」

「だからっ!!今日は無礼講!!さあ皆でパーティーよ!!!Are you lady girl's!?!??」

ぴしゃあああんっ!と床を鞭打つカコ。…真昼間から、何て格好を!

「OK!!!ヤッハー!!!」

拳を突き上げるメイド達。…どうすればよいのか、このわけのわからないテンションを。

「…ラ、ラスタさん…!あの、あのっ!…まどろみ猫さんから、お手紙です…」

幼女のようなメイドが、おずおずと声をかけてきた。彼女が高名なポケモン医学者など、誰にわかるだろうか。

「…ああモモ。どこにあるのですか?」

あの猫め…歯ぎしりしながら、モモが指した先を見る。

「…リア…もつと普通に渡してくださいよ…」

手紙はさっき投げられたナイフで、壁に縫いとめられていた。ナ

イフを抜いて、読む。

『今回は、番外編です。女の園で楽しんでください。番外ですから、何をしてもいいですよ！…ナニをしても！』

では、頑張ってくださいね。(笑)』

「…(笑)じゃないです！！」

感情に任せ、手紙を真つ二つに裂く。…どうしてくれよう、あの猫め！

「ラストさん！飲んでる？」

グラス片手のリアが、肩を組んでくる。

「…飲んでますとも！飲まなきゃやってられません！！」

ぐいっと、かなりアルコール度数の高い酒を呷る。酔いが回るが、このふわふわとする感じが堪らない。

「あははははははははははは！！…！！そ…そ…！たまには息抜きしなよ…！！」

ばしばし私の肩を叩いて、リアは会場に戻っていく。

「は……すごい眺めですね…」

大広間の隅。壁にもたれてやけ酒を飲んでいた私は、会場を見直した。コスプレ大会のようになっている。

仕事仲間達は、思い思いに酒を飲んだり料理を食べたり叫んだりクラッカーを鳴らしたりポケモンバトルをしたり…ってあれ？

ポケモンバトル！！？？

「ちよっ！？まっ」

「『かえんほうしゃ』！！！」

ヒトカゲが、火を噴く。

「『ミラーコート』！！！」

ソーナンスが、はね返す。

…ばっかあああああああ！！誰か止めなさい！！

「カメックス！消火してください！！」

「ガメエ！！！」

威力が増幅し、火事になりかけた火を、カメックスが消す。

「室内ですよ！？いくら酔っているとはいえ、それくらいわかるでしょう！？」

逃げようとしたメイド二人の襟首を掴んで、お説教を始める。

「ごめんなさい、ラストさん……」

カメックスの噴射した水を浴びて酔いも覚めたのか、正座して反省を示す二人。

「気を付けてくださいよ？まったく……ほら、風邪を引く前に着替えきなさい」

「はい！」

失礼しますと会場を出ていく二人。

「お～お～……やさしくラストさん！」

「何ですかリア……飲み過ぎですよ」

からからと笑っているリア。

「ラストさん、私と新しい世界の扉を開きましょう！」

「……遠慮します」

ボンテージ、といっただろうか？ぴったりとした黒の、かなり際どい衣装のカコが誘ってくる。……その手の鞭で何をするつもりなのかは、訊く気もしない。

「ラストさん」

どうぞと、モモがグラスを渡してきた。……よく冷えた、無色透明の……

「お水です……飲み過ぎは、よくありませんから」

……まともだ。まともな子がいる。

「ありがとう……」

喉が渴いていた。飲んでいると、

「……あの、言っているのかわかりませんが……みなさん、ラストさんのお疲れ会だって……まどろみ猫さんに頼んで、番外編用意してもらったんです……」

え？

「ラストさん、お休みなしで働いてるし…私達のことも、気遣ってくれるし…だから、普段お世話になってるお礼もこめて、パーティー開こうって…」

モモの視線は、会場に向けられている。

「驚かせようって、こっそり準備してたんですけど…ばれちゃったから、こうして…」

ただの番外編パーティーになっちゃいました。やっぱり、ラストさんに指示してもらえないと上手くいきませんね。

「そう、だったのですか…」

涙腺にきまずね…。こういうの。

「みなさん、ラストさんを困らせるつもりはないんです…わかってあげてくださいね」

笑顔で言うと、モモも会場へ戻っていく。

…旦那様。いい職場ですよ、ここは…。

モモの背中が、会場が、ぼんやりと滲んだ…。

「可愛い子がいっぱい！綺麗なお姉さまがいっぱい！ごちそうもいっぱい！天国ですなここは！」

立食式のパーティー。背が足りないそれは、ぴよんぴよんと跳び上がって欲しい料理をとっていく。

「な・に・を・しているのですか？」

首根っこを引っ掴むと、ぶらんと宙に浮く黒い体。三角の尖った耳、ふさふさとした尻尾。

「あれ、ラストさん。こんばんは〜！」

ピンク色の肉球がついた前足を振って、挨拶してくるそれ。

「こんばんは。何をしているのですかあなたは」

ゆさゆさと、左右に振る。首輪についた透明なプレートも、一緒に揺れる。

「にゃ！？…いや、タチバナさんが『ここは男の楽園だぜ』って言うから見に来たのですよ〜！」

庭師であるタチバナは…鞭を持ったカコに追い回されている。

「ほら！タチバナさん、すぐに気持ちよくなるわよ！」

「…やなことった！俺には、女房と子供がいるんだ！家族のためにも、目覚めてたまるかああああ！！」

必死で鞭をかくぐるタチバナ。楽園というより、地獄だろうに。周りは、助けることなく笑っている。頑張れ〜とか、もし目覚めても奥さんには黙っておくよとか、声援を送っている。

「皆さん、楽しんでるみたいで…ラストさんは？楽しくないですか？」

こうして話している間にも、その目は色を変えていく。明け方の空の色、深い海の色、燃え盛る火の色、くすんだ灰の色…。

「…楽しいですよ。たまには、こういうのも悪くありません」
賑やかに、慰労もいい。

「そうですか。ならいいです」

私と同じ薄紫の瞳を細めて、それは笑う。

「…で？どの子が狙いですか？あのお姉さんとか？」

「逝ってらっしゃい、まどろみさん」

にやにやと笑うまどろみ猫を、カコの元へ投げ飛ばす。

「にやあああああああ！！??」

え？作者にそんな真似してもいいのかって？

構いませんよ。…今夜は、無礼講です！

この（かなり変わってますが）素晴らしい仲間達と、これからも頑張っていきますよ！

番外編 くラストと仲間達く（後書き）

思いついたらすぐ執筆。それが悪ノリ。まどろみが登場したのも悪ノリだからです。：なんて便利な言葉でしょうか。

この番外編、はじめは「この小説の世界観をラストさんに説明してもらおう！」という至極まともな発想から生まれたのですが、メイドさん達が暴走しました。：なんていい職場だろうか。私を飼ってくれませんか？

人はその人の物語の主人公。メイドさん達にも、それぞれの物語があるので。書いたら、長くなる！それだけが、確かなことではない！

…当たり前だけど、旅の移動手段って徒歩よね…（前書き）

明けましておめでとうございます！今年もよろしくお願ひします！

やっと『ワカバタウンポケモン盗難事件』です！いつも主人公が一番にポケモンを選ぶので、こんな展開もいいのではないかと思ひ書きました。彼が盗ったポケモンは、はたして…？

…レックウザの出番の少なさ。何分巨体なもので…。

…当たり前だけど、旅の移動手段って徒歩よね…

毒気を抜かれた。マスターボールのことも、もうよくなった。

『本当に、ありがとう。また、会えるといいわね』
女と別れた。…淡泊な女だ。

「……名前、聞きそびれたな」
角を曲がって、消えた女。長い尻尾のような髪が、遅れてその後をついていく。

見送ってから、そういえば俺の名前も教えなかったと思に至る。

…何考えてんだ、俺は。あんな女、どうだっていいはずだ。
さて、……行くか。

ヒビキくと、デートデート！隣町のヨシノシティの、いつもの喫茶店でパフェを食べて、手を繋いでショッピング！

ワカバタウンは小さな町。ヨシノシティに比べると、お店も少ないの…。

「あ、モンスターボール安売りしてるよ！一個百円、十個で千円だつて！お買い得だから十個買おうよ！」

冒険の準備をしようと、フレンドリィショップに入って目に付いたのが、ワゴンに山積みされたモンスターボール。

「コトネちゃん、値段は変わってないよ…でも、必要だから十個買おうか」

にこって笑うヒビキくん。…ホントだ、値段変わらないね。
店員さんが、くすくす笑ってる。聞こえちゃったみたい。

「…『なんでもなおし』、状態異常が全部治せるけど、その分値が張るなあ…」

ヒビキくんはすごいなあ…私なんて、ちんぷんかんぷんだよ。スクールで習ったけど、授業中よく居眠りしてたから…。

『なんでもなおし』を手に、考えてるヒビキくん。あくかつこい

い…。

ヒビキくんと一緒に、たくさんお買い物したよ！…おこづかいも、たくさん減ったよ！

「準備も万端！…帰ろう、コトネちゃん！」

モンスターボールが二十個＋プレミアボールが二個、『きずぐすり』を五個。

重いのに、ヒビキくんは何も言わずに持ってくれる。そういうところ、大好きだよ！

「うん！帰ろう！」

ワカバタウンに！

29番道路。段差からぴょんと飛び降りて、ワカバタウンを目指す。

レックウザに乗せてもらえば、文字通りひとつとび。でも、それでは意味がない。

木々の間から覗く影、時折り揺れる草むら。

息づくポケモン達。バトルするトレーナーも見かけた。

腰のベルト。紫色のボールの中には、レックウザ。

…頑張ろう。自分でできることは、自分で。

黒のブーツで草を踏み、歩く。

ちよっと、休憩しよう…。

怠惰なお嬢様暮らしだったから、体力がまるでない。休憩を繰り返して、ワカバタウンに着いたのは日も暮れかけた頃だった。

「…着いた」

のどかな、ヨシノシティよりも小さな町。点在する民家。

今から訪問したら、失礼だろうか…でも、研究所には煌々と明かりが灯っていた。

パパからの手紙。内容はわからないけれど、早く届けるに越したことはない。

疲れた足を叱咤して、私は研究所へと向かった…。

「あれ？お客さんかな？」

ふらふらとした足取りで、研究所に向かっていている女の子がいた。

「こんな時間に？…急用なのかな？」

重いよねと、荷物を半分持つてくれたコトネちゃんが言う。とても優しく可愛い、僕にはもったいない彼女だ。

「ふらふらしてるよ…怪我してるのかも!？」

はっとしたように、コトネちゃんが叫んだ。女の子は研究所の前で、壁に手を当てて胸を押さえているようだ。

「…ヒビキくん!行くよ!」

だと、コトネちゃんが走り出す。

「うん!」

僕も、後を追った。

「…大丈夫!?怪我してるの?」

血相変えて駆け寄ってきた、見知らぬ(当然)女の子。後ろから、連れらしき男の子も顔を覗かせている。

「…いえ、あの…慣れない道を歩いたものだから…」

幾つもの段差を飛び降り、緑に覆われた道路を歩いた。

…疲れた。体力なんてないから、すぐ息切れしてしまう。

胸を押さえてせえせえ言っていると、怪我人に見間違えられたらしい。

「へ?…つまり」

「…疲れて、休んでたってこと…?」

口をぽかんと開けている二人。…揃って、笑い出した。

「あははは!…なんだ!怪我でもしてるんじゃないかって、焦っちゃったよ」

「早とちりでよかった!…僕、ヒビキ!彼女はコトネちゃん!」

笑い終わって、自己紹介。そういえば、ヨシノシテイで出会った

彼の名前は訊けなかった。

「…カノン」

旅に出て『初めて』名乗ったこの二人が、私の大事な『友人』になることを、このときの私はまだ知らなかった…。

ヒビキは、ウツギ博士のご子息なのだそうだ。立ち話もなんだか
らと、研究所の中に通されて…。

「父さん!？」

研究所の奥。縄で縛られ床に転がされているウツギ博士らしき男性と、その横に立つ…

「…あ」

燃え立つような、赤い髪。金色の鋭い瞳が、私を捉えている。
数瞬が、永遠に感じられた。

それを破ったのは…

「誰だお前は！」

ヒビキだった。

「…っ！」

彼の視線が、研究所の机に向けられる。そこにあるのは、三つの
モンスターボール。

「!?!やめろ!それは…!」

制止の声を振り切って、彼はその中の一つを掴んだ。

「待て！」

ヒビキが駆けだす。逃げ道はない。

「ヒビキくん!？」

コトネが、名を呼ぶ。

「……………」

彼が、動いた。窓に向かって。

「なっ!？」

窓を開け放ち、身軽に窓枠に跳びのった彼。一瞬私のほうを見て
…研究所を飛び出していった。

「ウツギ博士！大丈夫！？」

コトネが駆け寄る。ヒビキも。

「父さん！」

「…！」

彼を。あの、モンスターボールを。

研究所を出て、私はマスターボールを投げた。

しまった。三体ぜんぶ奪うつもりが、一体しか手に入らなかった。

「ゴルバット！」

ゴルバットにつかまって、逃げる。…あの、女のせいだ！

助手が帰宅し、ウツギが一人になった隙に侵入してふんじばった。さて、ジヨウトの初心者用ポケモン、ワニノコ、ヒノアラシ、チコリータをいただこうとしたら…

まさかの訪問者。こんな時間に来るやつなんていないだと、鍵を閉めなかった自分の迂闊さを呪った。

まあいい…こいつらもと向き直ったら…

いた。あの女が。

こつちを、俺を見ていた。

…翡翠色の、瞳で。

見られた。早く、この場から逃げなくてはと思った。来た目的も、忘れかけていた。

慌てて一つを掴み、窓から逃げ出した。あの女の視線から、逃げるために。

…何でだ。何で、こうなったんだ！？

「…待って！そのモンスターボール、返して！」

あの女が、追って来ていた。…俺の予想通りだったが、まさか伝説のポケモンとは…。

「レックウザか。…ゴルバット、『くろいきり』」

指示に従い、ゴルバットが発生させた『くろいきり』が、視界を

遮る。超音波を使い、暗い洞窟を自在に飛行するゴルバットに問題はない。

だが、レックウザは違うだろう。あいつらが困惑している間に、さっさと…

「レックウザ、『たつまき』！…加減をしてね」

「ぐおおおん！」

加減したのかと疑うほどの強風。吹き荒れた風に、『くろいきり』が吹き飛ばされる。

視界が晴れる。橙色から闇色へ染まりつつある空と、緑の巨体。

「…また、会ったわね」

背中に乗った女が、言う。

「こんな再会、ドラマだけかと思ってたけど…」

俺を見て、僅かに眉をひそめる女。そんな女を見て、口の端が吊り上った。

「……………よかったな。『初めて』だろ？」

「ぐるるるる…」

レックウザの黄色の目が、険を帯びた。

「…ダメよレックウザ。彼には助けてもらったし…」

宥めるように、女がレックウザの背中を撫でる。…まさか、言葉が解るのか？

「お前、そのレックウザの言葉が解るのか？」

今、レックウザは唸っただけだった。それなのに、女は人間が話したかのように応答している。

「私が解るのではなくて、レックウザがテレパシーで言いたいことを伝えてくれるの…ねえ、研究所に行つて」

「断る」

言いかけた女。口を閉じる。

「俺は力を求めている。そのために、強いポケモンが必要なんだ。…返す気はない」

強いポケモン。それが、俺の求めるもの。

「そのレックウザも、いずれ俺がもらっ…じゃあな」

俺には、わかっていた。この女が、俺を叩き落とすことはない。
「ぐるるるるるっ」

よいのかとでも言いたげに、レックウザがあの子を見る。女が、
首を振る。

「俺はゴールド。…お前、何て名前だ？」

上空での再会。訊いておこう。

「…カノンよ。このレックウザは、私の『所有物』ではないわ」
カノンは言った。

「レックウザが、あなたについてゆくこともあるかもしれないわ…
このレックウザが、そうしたいと思えば」

またねと手を振るカノン。レックウザは、降下する。

…本当に、変な女だ。

カノン。また、会うだろうな。

俺は、モンスターボールを握りしめ、その姿を見送った…。昏間
とは、少し違った気持ちで。

「……通報は、しないで。私が、彼から取り戻すから」

天空から降り立った、雄大なドラゴンポケモン。その背中に乗っ
た彼女は、そう言った。

緑の瞳を、闇夜に煌めかせて…。

…当たり前だけど、旅の移動手段って徒歩よね…（後書き）

お気に入り登録、ありがとうございます！こんなゲーム・アニメ・自己設定ごっちゃの作品を読んで下さる方、本当にありがとうございます！

10話ごとに、番外編を書きたいと思います。本編とは関係ありませんが、よろしければそちらもお付き合ってください。

…サブタイトル（笑）カノンお嬢様…！！

どきどきわくわくしている！縮めてどきわくなう！（前書き）

…サブタイトル、意味がわかりませんね（笑）

ポケモンをもらうのって、ものすごいテンションあがると思います。まどろみ猫はジョウトの三匹の中で、一番ヒノアラシが好きです。

…ウツギ博士って、博士の中で一番キャラがうす…何でもないです。

では、久しぶりのバトルです！お付き合いくださいませ！

どきどきわくわくしている！縮めてどきわくなう！

「…うむ。カノンがしたいようにすればいい。吾輩はいつでも手を貸すぞ？」

2本しかないがと、笑うレックウザ。ヨシノシティでのゴールドとの出会いと、夕方の盗難事件について説明した。

今は、すっかり日も落ちてている。たくさん星が瞬く夜空を飛行して、レックウザは吼えた。

「それにしても、生意気な小僧だったな。…絶対に、吾輩は従わんぞ！」

『そのレックウザも、いずれ俺がもらう…』
彼の言葉に、相当怒っているレックウザ。

「…そんなに、怒らないで…。あなたが、それだけ強いってことよ
『俺は力を求めている。そのために、強いポケモンが必要なんだ』

強いポケモン。伝説のポケモンであるレックウザは、彼の求める
『力』そのものだろう。

盗みに手を染めてまで、そこまでして『力』を欲するのか。どうしてか。

「……あのとぎ…」
研究所で。彼の、黄金の瞳とあったとき。

望み、求めた力を手にする喜びでも、邪魔が入った焦りでも、苛立ちでもなかった。

「うん？どうかしたか、カノン」
…あの目に、あったのは…

「…何でもないわ。コトネが待っているから、戻りましょう」
もっと違う、複雑な『感情』だった…。

「…へえ〜！じゃあ、そのレックウザ？が、カノンちゃんの初めてのポケモンなんだね！」

コトネの部屋。旅立って初めての夜は、ホテルでも野宿でもなく、まさかのお泊りだった。夕ご飯をご馳走になって、お風呂に入らせてもらって、コトネとおしゃべりをしている。

この女の子は、とにかく元気で明るい。くるくる表情が変わって、とても可愛い。

「…うん。友達よ」

紫色のマスターボール。緑の、強くて優しい初めての『トモダチ』

「友達かあ…ふふっ」

につこおっと、コトネが笑う。

「？」

何か、変なことを言っただろうか？

「カノンちゃん、無表情で何考えてるかよくわからなかったけど、今すっごい優しい顔してたよ〜！」

にこにこ笑うコトネ。そっと、自分の頬に触れる私。

「…そんな顔してた？」

確認すると、

「うん！してた！」

即答された。

…わかったことが、また一つ。優しい気持ちになると、優しい顔になるのだそうだ。

「どれどれ…？バーンくんからの手紙には、何て書いてあるのかな？」

深夜にしてようやく盗難から立ち直った父さんが、カノンちゃんから手渡された封筒をあける。中に入っていた一枚の便箋を広げたとすれば…すっこけた。

「父さん？どうしたの？」

冒険の準備の、確認の確認の確認の確認をしていた僕は、テープ

ルに突っ伏して震えている父さんから、便箋を受け取る。

『ウツギへ！俺の娘が旅に出たぞ！どきわくなう！バーンより』
ずっこける。…馬鹿でかい字で書かれた、その内容に。

「わざわざ手紙に書くようなことじゃないよ！どきわくってこの人
幾つ！？娘さん、この手紙届けにワカバタウンまで来たんだよ！？
なうって知らんがな！」

会ったこともないバーンさんに、立て続けに突っ込む。とにかく、
言いたいことは、

「…メールにしてよおおおおおおお！！」
それだった。

「…さて！ここにある二つのモンスターボールの中には、ポケモン
が入っています！」

ここ。ウツギ博士が示した机の上には、二つのモンスターボール。
「ジョウト地方ではワニノコ・ヒノアラシ・チコリータの三匹が初
心者用ポケモンとして認定されています。昨日の事件で一匹、無断
で持っていかれてしまいました！」

ゴールド。彼が、レックウザを奪うつもりなら、いずれまた出会
う。

そのときに、返してもらわないと。

「…ヒビキとコトネちゃん！それぞれのパートナーを選んでくれた
まえー！」

話しているうちにテンションがあがったウツギ博士が、芝居がか
った仕草で両手を広げる。

うんざりしたように父を見るヒビキと、つられてテンションをあ
げるコトネ。

「はい！ヒビキくん！選ばせてもらおうよー！」

…二択だけだね。ほそつとヒビキが呟くが、ハイテンションの二
人には聞こえない。

「よし、いっくよー！！」

放られるモンスターボール。現れたのは…

「チコリータにワニノコ！」

「かわいい〜!!！」

頭の大きな葉っぱが特徴的なチコリータと、大きな口に小さく鋭い牙を生やしたワニノコ。

「チコチコオッ！」

「ワニワニイ！」

元気よく鳴いて、飛び跳ねる二匹。

…レックウザと比べるのはどうかと思うけれど、小さいなあ…。

「私はチコリータ！」

「僕はワニノコ！」

各々選んだパートナーを抱き上げて、微笑みあうコトネとヒビキ。

「チコ？」

「ワニイ？」

なぜ抱き上げられたのか、この人間は誰なのか、ぽかんとする二匹。

「チコリータ！私コトネ！一緒に旅に出よう？」

「ワニノコ、僕はヒビキ。コトネちゃんとチコリータと僕とキミ、

二人と二匹で旅をしよう！」

弾けるような笑顔のコトネと、さっきまでのテンションの低さが嘘のようなヒビキ。

「…チッコオ！」

「ワニワニワア！」

二人の言葉の意味を理解した二匹が、目を輝かせて鳴く。
同意、だ。

「…うんうん。いつ見てもいいね、ポケモンと人の出会いは…」

目を細めて、頷くウツギ博士。

「チコリータとワニノコ…カノンちゃん、奪われたヒノアラシの」と、よろしく頼むね？」

ゴールドが奪ったのは、炎タイプのヒノアラシ。

「…彼から、必ず取り返すわ」
通報しようとしたウツギ博士を止めたのは、私。
彼を、ゴールドを、『悪人』にしたくなかったから。ゴールドは
きつと、盗みなんてしなくても、強くなれるから。
やり直せる、はずだから。

「ヒノアラシか…うん、悪くない」
「ヒノオツ！」

元気もいいし、鍛えればさぞ強くなるだろう。

「いいか、俺と強くなるんだぞ？」

「ヒノヒノオ！！」

やる気を出したヒノアラシが、背中の炎を噴きだす。

……こいつは、強くなる。俺は、そう確信した。

「パンパカパン！！ポケモン図鑑です、どうぞ！！」

「ありがとうございます！！」

…私だけが、このテンションについていけない。

「カノンちゃんも、どうぞ！たくさんのポケモンと出会ってね！」

さつと差し出されたポケモン図鑑。思わず受け取ってしまったが。

「え？ウツギ博士、いいの？」

「いいともいいとも！…モンスターボールもプレゼントしちゃうよ」

「！」

「さすが父さん太っ腹！！」

「キヤー！お義父さんかつこいい！！」

…本当に、大丈夫だろうかこのノリ。

「ありがとうございます」

いただいたポケモン図鑑とモンスターボールを、鞆にしまう。

「よし！旅立ちの記念に写真撮影、ポケモンバトルだ！いっくよ」

「！！」

「お〜！！！！」

拳を突き上げ、研究所を飛び出す三人。

「……これが、普通なのかしら？」

私の呟きに、答えてくれる人はいない。

「ワニノコ！『いかり』だ！」

「チコリータ！『はつぱカッター』！」

始まったポケモンバトル。草タイプのチコリータが有利かと思われたが……

「耐えるワニノコ！『ひっかく』！」

「ワニイ！」

効果抜群である草タイプの技を耐え、ワニノコの『ひっかく』が決まる。

「チコオツ！？」

草原に転がるチコリータ。

「大丈夫チコリータ！？……『たいあたり』！」

トレーナーであるコトネの声に応え、チコリータの『たいあたり』が決まった。

「……『いかり』発動中だよ、コトネちゃん！ワニノコ、『ひっかく』！」

挑発的に笑うヒビキ。ワニノコの、威力がわずかに増した『ひっかく』。

「『いかり』……？あつ！？そつか、『なきごえ』！」

チコリータの鳴き声が、ワニノコの攻撃を下げる。

「チッコオ！」

『ひっかく』を受け、再びゴロゴロと転がるチコリータ。

「……今だワニノコ！『みずでっぼう』！」

「ワニワア！」

大きく開いた真つ赤な口から放たれる『みずでっぼう』が、立ち上がるうとしたチコリータを木にたたきつける。

「……チコリータ！」

目を回したチコリータに駆け寄り寄るコトネ。…勝負あり。

「チコリータ、戦闘不能！勝者、ヒビキ！…初めてとは思えないバトルだったよ、二人とも！」

頑張ったねと、ワニノコを撫でるウツギ博士。

「ワニノコ！お疲れ様！」

「うん、ヒビキ。」

「ワニノコ！」

嬉しそうなワニノコ。ぴよんと跳び上がって、ヒビキに抱きついた。

「わあ！？…うん、ありがとうワニノコ！」

初勝利に踊り出さんばかりのヒビキとワニノコとは対照的に、

「チコリータ…負けちゃってごめんね。ゆっくり休んでね…」

落ち込むコトネ。チコリータをボールに戻すと、帽子を目深にかぶる。

「……悔しいなあ…」

ぎゅっと、結ばれる口元。

ポケモンバトルは、こういうもの。勝者がいて、敗者がいる。

「…ヒビキくん！次は負けないからね！」

口元しか見えないコトネが、叫ぶ。

「うん！これから一緒に、強くなるう！」

負けても、『終わり』ではない。

……これは、『始まり』だ。

どきどきわくわくしている！縮めてどきわくなう！（後書き）

カノンお嬢様のお父さんの名前は、『バーン』です。名前の由来は…技名です。

カノン…『ハイドロカノン』

バーン…『ブラストバーン』

ラスタ…『ラスターカノン』

初めてのポケモンバトル。勝ったら嬉しい。負けたら悔しい。そういうものだと思います。

ポケモンとは、トレーナーとは？答えはきつと、見つかります…

！

彼が、ポケモンリーグ決勝戦をすっぱかしたワケ（前書き）

更新、遅れまして…。他の話を書いたり、筆が進まなかったり、出かけたり、DVD買って徹夜で鑑賞したりしていたら…。

相変わらず展開遅いですが、どうぞ…!!…あ、ゴールドは出ません（笑）

彼が、ポケモンリーグ決勝戦をすっぱかしたワケ

「はあっ！」

気合の声と共に振り下ろされた、鋼鉄の棒。

「！」

同じ鉄の棒で、受け止める。屋敷に響く金属音と、手を痺れさせる強い衝撃。

「…退きなさい、リア！私の邪魔は許しません！」

間合いをとり、細腕でやすやすと鉄の棒を振るうメイドを見据える。

「…退きません！あなたを止められるのは、私だけですから！」

右頬にある、痛々しい傷跡。橙色の、強い眼光を放つ目。

「頑張つてリア！」

「ラストさん！落ち着いてください！」

庭に集まったメイド達。仕事を放って何見物しているのですか。

「…行きます！」

リアが、芝生を蹴る。横薙ぎの一閃。

「…っ！」

躲す。鼻の先をかすめた棒。

チャンス！

「はっ！」

リアの手から、棒を弾き飛ばす。リアの鼻先に棒を突きつけて、笑う。

「…勝負あり、です」

「…くっ！」

顔を悔しげに歪め、リアが唇を噛む。

よし、これで…！

「では、私はお嬢様のご様子を見てきます！留守は…」

「すっきあり〜！」

言いかけた私の身体に巻きついた、鞭。

「カコ!?」

腕を封じられた私を見て、にやあつと笑うリアとカコ。

「まさか!? あらかじめ仕組まれていた!?」

「私一人では荷が重かったので、カコに手伝ってもらいました」

「もうラストさん! いくら心配だからって、追っかけちゃいけませんよ〜!」

晴れやかな笑顔の二人。…と、メイド達。

「ラスト: お嬢様なら大丈夫だ。信じて、待ってようぜ」

だからな、まあちつと頭冷やせ。

ほんと、タチバナに肩を叩かれた。

「…わかりました。私一人だけというのも、不公平ですしね」

がつくり肩を落とす。…行きたかった。

「あの、あきらめましたから…この鞭、ほどいてくれませんか?」

ものすつごく、不安になる。おそろおそろカコに頼むと、

「え?…いいじゃないですか、このまま一緒に愉しみましょうよ!」

にぱあつと、天使のように笑うカコ。

顔が引き攣るのが、はつきりわかりました。

「…っだ、誰か、助け…!」

周囲に救いを求めるも、

「…じゃ、みんな仕事に戻りましょう!」

「さうて、剪定続けようかね」

無情。仲間全員、屋敷の中へと。

「は、薄情者!! カコ、こっちに来ないでください!」

にじり寄ってくるカコ。…どうにかして、この窮地を脱しなければ!」

「ふふ…痛いのははじめだけ。すぐに…!」

妖しく光る、カコの目。その息が荒いのは…考えたくない。

「ラストさん、たまにはこういう快樂に身を任せてみませんか?」

「結構です!! 断固拒否します!!」

…この日は、カコの魔の手から逃れるのに、一日を費やしてしまいました…。

カノンお嬢様…私は、頑張っていますよ。いつでも、あなたを想っていますから…

だから、連絡くらいしてくださいね？

「はあ…はあ…はあ…はあ…」

…どうして、コトネとヒビキは息一つ乱してないの…？

「…カノンちゃん、休憩しよっか？」

二人の後ろを、のろのろ歩いていた私に、コトネが声をかけてくれた。

「…だい、じょう、ぶ…」

…私って、本当に体力ないなあ…情けなくなってきた。

「29番道路は、段差が多いからね…慣れてない人には、ちよつとキツイかもしれない」

「ごめんなさい、『ちよつと』じゃなくて、『かなり』きついわ。

「無理せずに、休憩しよう。急ぎの旅でもないし」

ヒビキの提案に、

「さんせー！」

元気よく答えるコトネ。

「うん…ごめんね…」

三人で、ヨシノシテイのポケモンセンターに向かう途中。一日早だけとはいえ、『先輩』だからと、同行を頼まれたのだが…

明らかに、私が二人の足を引っ張っている。

「謝らなくていいよ」

「そっだよーうんとね、こういうときは謝らなくていいと思うよー！ワカバタウンを旅立つときに、あらかじめ『体力がない』と言っておいたのがよかったのか。

二人は、怒ることなく木陰に座った。私も遅れて、座る。

「……謝らなくて、いいのなら…お礼ね」

剥きだしの膝裏に触れる草。こしよばゆい。

「…ありがとう。私のペースに、合わせてくれて」

付き合いきれないと、置いていって欲しくてよかった。でも、二人は私に会わせて、ゆっくり（それでも私より早い）歩いてくれた。

「…や、やだな〜！照れちゃうよ…」

「へへ…お礼言われるほどのことじゃないけど…」

はにかむ二人…かわいい、かも。

「ううん…ありがとう、コトネ、ヒビキ」

…ヨシノシテイで別れたら、二度と会えないのかな…。

「あ、これだよ通信機。使う？カノンちゃん」

テレビ画面と、備え付けられた受話器。

「…うん。みんなに、連絡したいから…」

椅子に座って…さて、どう操作するものなのか。

「お金入れないと、使えないよ」

「…あ」

コトネはジョーイさんに、バトルで傷付いたチコリータの回復を願っている。

ヒビキが、ここだよと硬貨投入口を指す。…うん、大丈夫わかってた！

「そ、そうよね…お金入れないと使えないわよね…」

屋敷の大型通信機は、お金なしで使えた。だから、忘れていた。

「…あら？おかしいわ、入らない…？」

「ちよ、ちよつとカノンちゃん！？お札は使えないよ！？」

ヒビキに止められた。…あ、そっか…。

「…もしかして、使ったことない？」

頷く。

「ここに小銭を入れて、受話器を取って…電話番号を入力して？」

促される。お屋敷の電話番号くらいはわかるので、間違えないよう慎重に入力する。

「……プー、プーっていう、呼び出し音が聞こえるでしょ？」
渡された受話器に耳を当てる。プー、プー……うん、聞こえる。
「向こうが出たら、通話が始まるから……あっ！」
ぱっと、画面がついた。呼び出し音が、聞こえなくなった。
「……もしもし？」

『お嬢様！？……ご無事のように、安心いたしました！』
橙色の髪と目のメイドさんが、にっこりと笑った。頬が吊り上つて、右頬の大きな傷の形が、少し変わる。

凝視してはいけない。そう思っても、視線は痛々しい傷跡に向いてしまう。

「こんにちは、リア……。みんな、元気になっているかしら？」
無表情なカノンちゃん。

『ええ！元気ですよ！……ただ、ラストさんが』
くすくす笑い出す、リアというメイドさん。

「……ラスト？どうかしたの？」

『うーん……お嬢様に勝手に話すと怒られてしまいますので、ラストさんに直接訊いてください！今、お呼びしますから！』

少々お待ちくださいと彼女が言って、画面が白くなる。

「お待たせ〜！チコリータ、元気にしてもらったよ！」

たたつと、コトネちゃんが戻ってきた。

「あれ？電話中？」

彼女が、画面を覗きこむ。そのとき、一人の男性が映しだされた。

『……カノンお嬢様！お久しぶりです！』

「ラストさん！？」

カノンちゃんが何か言う前に、僕はその男性の名前を叫んでしまっていた。

「……ヒビキ、ラストと知り合いなの？」

画面から視線を外したカノンちゃんが、尋ねてくる。

『申し訳ありませんが……どちら様でしょうか？お会いした記憶はあり』

ませんが…?」

訝しげに、薄紫の目を細めるラストさん。…ああ！ビデオで何十回も観た憧れの人と、会話ができる！

「あ、あのっ！僕、ヒビキです！七年前のカントーリーグに出場されてた、ラストさんですよね！？優勝候補ナンバーワンで、決勝戦まで一体も戦闘不能状態にならずに勝ち進んだほどの実力者でありながら、決勝戦前日に行方をくらませて優勝を逃した、あのっ!？」
一気にまくし立てる。疲れた様子のラストさんは、それでもかっこよかった。

『ええ、まあ…。その、ラストです』
「やっぱり！」

「僕あなたのバトルを見てから、ずっと憧れてたんです！ポケモンとの間に強い信頼関係があつて、トレーナーもポケモンも目の前の勝利目指して頑張ってるその姿に感動して…！あなたみたいなトレーナーになりたいなつて、ずっと！」

『は、はあ…。それは、どうも…』

「お会いできるなんて夢みたいですよ！よろしければ」

「…ちよつとヒビキくん！ラストさん？が引いてるし、カノンちゃんも驚いてるよ！」

画面から、無理矢理引きはがされる。身を引いていたカノンちゃんが、目を丸くして僕を見ている。

『…えつと…そちらのお二人は、カノンお嬢様の…?』

ラストさんの問いに、僕とコトネちゃんは同時に答える。

声を、合わせて。

「…友達です！」

ラストさんの目も、真ん丸になった…。

コトネとヒビキの紹介を済ませ、これまでの出来事を話すと、ラストは複雑な顔をした。

『ご友人ができたのは、喜ばしいことですが…そのゴールドという

少年は、気にかかりますね』

私の両隣。ラストを前に、話したくてうずうずしているヒビキと、それを珍しく厳しい目で監視しているコトネ。

まさか、ヒビキがここまで熱くなるとは…。

「…心配しないで、何て言っても無駄よね」

『ええ！いつだって心配しています！…お嬢様が無茶をしていないかとははららっばなしで…！』

今のところ、無茶はしていない。でも、いつかするかもしれない。

「…私だって、ラストのこと心配しているわ」

『！？』

「…リア、また暴れていない？カコに鞭持って追いかけられたりしていない？モモに変な注射されていない？それから…」

はあ〜と、ラストが長い溜息を吐いた。

「どうしたの？」

心底がっかりしているみたいだ。

『…いいえ、何でもありません。まあ実際に、今日はカコに追っかけられましたけど…』

苦笑するラスト。…やっぱり。

「どつりで、疲れた顔してると思ったわ。…いつもいつも、お疲れ様」

『ありがとうございます、お嬢様』

にっこり微笑むラストとは、ずいぶん長い間会っていないような気がした…。

「ラストさん！決勝戦前日に行方をくらませたわけを、よければ教えてください！」

私がラストと話している間、コトネに羽交い絞めにされていたヒビキが割り込んできた。

『…ああ！旦那様が、ふたごじまの氷で作ったかき氷を食べたいと仰せになられたので！』

いや、防寒対策が完璧ではなくて死にかけましたよと、笑うラスタ。

「……………」

啞然としているヒビキ&コトネ。

「…じゃあね、みんなによろしく」

受話器を置く。画面が真っ黒になって、通話終了。

…パパ…ラスタ…

やっぱり、パパが絡むとラスタはおかしくなる…。

彼が、ポケモンリーグ決勝戦をすっぱかしたワケ（後書き）

ワカバタウンとヨシノシティの距離は近い、ということ……。お願いします。

ポケモンセンターの通信機、無料のはずがない！通話料、十分で百円です！カノンお嬢様、一万円札をねじ込もうとしてはいけません（笑）。

ヒビキは、いったん熱くなると周りが見えなくなります。そのときはコトネが止め役です。

メイドさんの名前の由来…きのみでした。

リア…イアの実

カコ…カゴの実

モモ…モモンの実

もちろん、この三人だけではありません。今はまだ、出番がないだけです。

次回も、お付き合いいただけると幸いです！

幾つになっても、男は男　くポケモンの卵、ゲットってことねーく（前書き）

カノンお嬢様は十六歳。ゴールドも十六歳。バカップルは十五歳です。今のところ人物設定を投稿する予定がないので、前書きに書いておきます。他の人は、機会があれば紹介するかもしれませんが。

…何で十歳じゃないのかって？…十歳じゃ、いちやこらできないでしょうが！いや、できますけどやっぱりまどろみとしましてはもつとこつ…！ねえ？（知らんがな！）

幾つになっても、男は男　くポケモンの卵、ゲットってことね！く

「…待ったあ！このゴロウ様に勝たなきゃ、この先へは行かせないぜ！」

30番道路の中央で、腕組みをし仁王立ちの少年。Tシャツに短パン。

「勝つ？…あ、ポケモンバトルをしようと言うのね」

「そうだ！誰か一人でも俺に勝てれば、通してやる！」

モンスターボールを握りしめ、バトルバトルと叫びだした少年。

…目がちよつと血走っている。

「…怖いよお、ヒビキくん…！」

「大丈夫、コトネちゃん！キミは僕が守ってみせる！」

ひしつと、ヒビキの腕にしがみつくコトネ。その肩を抱き、頼もしいことを言うヒビキ。

……なんだか、非常に声がかげづらい。二人の周囲だけ、世界が違っただけ見える。

「…そのバカカップルは後でいいや！おい、そのポニーテールの女…！」

びしいつと、指差される。

「お前から倒してやる…！」

女は私とコトネしかないないし、ポニーテールは私だけ。…バトルの相手に、指定されてしまった。

バカカップルと呼ばれた二人の方を向いて…あきらめた。色々。

ここは、ドラマの収録地？お互いの名前を呼び、見つめあっている二人を無視する方向でいこうと、私はマスターボールを投げた。

「ホントもう、調子こいてすみませんでした」

「コラアッ！」

トレーナーとポケモン。地面に手をつき、頭を下げる。

…土下座だ。誰がどう見ても、これは土下座だ。

「…はっ！カノンの初めてのポケモンバトル、どのような相手かと思えば…」

黄色の瞳を細め、レックウザは嘲笑する。

「吾輩を見て、腰を抜かすとはな」

ちなみに、レックウザが言っていることを理解しているのは、私だけ。バカップルことコトネとヒビキは、レックウザが現れたことに、気が付いてさえない。

「…コラア…」

コラッタが、不満げに小さく鳴いた。

「いついかなる相手と対しようと、いちいち動じていては勝つことなどできないぞ。そんなものは、負け犬の言い訳だ」

負け犬というより、負け鼠だな。それだけ言うと、コラッタにもトレーナーにも興味を失くしたのか、空を見上げるレックウザ。

格の違いを悟っているのか、コラッタは抗議しない。ぎりりと、歯を食いしばる音だけが聞こえた。

「コラッタ…悔しいのか？」

己の相棒。そう言っていたポケモンに、ゴロウは頭を上げて訊く。

「コラコラ！コラア！」

コラッタは、鳴く。私にも、コラッタの言いたいことがわかった。

「…そっか…俺だって、悔しいぜ…！」

拳を固め、ゴロウは立ち上がった。…よかった、土下座やめてくれて。

ポケモントレーナー同士がバトルしようとするのは当然だし、勝負にすらならなかったことで、土下座することはない。

「…お姉さま！俺はゴロウといいます！こいつは相棒のコラッタ！背筋を伸ばし、ゴロウが改めて自己紹介をする。

「俺達、この30番道路で一番強いトレーナーなんです！でも、お姉さまとそのポケモンのおかげで、自分たちがまだまだ未熟だったことがわかりました！ありがとうございます！」

「コラアッ!!」

びしっ!と擬音語がつきそうなくらい、紫色の尻尾を伸ばすコラッタ。引き締められた口元からのぞく前歯が、愛らしい。

「でも、お姉さまって…。私、まだ十六歳なのだけど。

見たところ、ゴロウは十歳くらい。彼からすれば、そうなるのかもしれない。

「私はカノンよ。このポケモンは、レックウザ。旅をしているの」
旅立ったのが昨日だということには、あえて触れない。私のような新人トレーナーに負けたと知ったら、彼のプライドが傷つくかもしれない。

「…………お礼を言われるほどでもないけど…お役に立ったのなら、嬉しいわ」

私がしたのは、マスターボールを投げただけ。でも、彼らの成長に一役買えたようで、少し嬉しい。

「カノンお姉さま!本当にありがとうございました!俺達もっと強くなります!」

「ラアッ!」

頭を下げ…今度は土下座ではなく、お辞儀だ…ゴロウとコラッタは、走り去っていった。

「…はれ?あのトレーナーは?」

「カノンちゃん、どうしてレックウザを出しているの?」

ようやく、バカップルことコトネとヒビキの意識が戻ってきた。

「…こやつら、大丈夫か?」

呆れたように、レックウザが呟いた…。

「おお〜ヒビキくんか!久しぶりじゃのう!」

にこやかなおじいさん。ウツギ博士の知り合いだそうだ。

「…おおっ!?両手に華とは…!うらやましい限りじゃなあ…!」

にこやかに細められていたその目が、真ん丸くなる。

「りよ、両手じゃありません!片手です!」

「…やった〜！ヒビキくんったら〜！」

ばしいつと、かなり力の入ったコトネの一撃。一步間違えば、ドメスティックバイオレンスだ。

「…ははは」

やっぱり痛かったらしく、ヒビキ涙目。

「…微笑ましいのお。ほれ、お嬢ちゃん方にいい物をあげようか」

おじいさんが、家の奥に入った…と思ったら、すぐに戻ってきた。

「…あ！」「」

何かの卵が入った、ケースを抱えて。

「ウツギくんが言うには、ポケモンの卵は、元気なポケモンの傍でないと孵化しないそうだな。…お嬢ちゃんのどちらか、この卵を孵してくれんかの？」

真っ白い卵。赤や青の、三角に近い模様がある。

「…あれ？僕は含まれてないの？」

ヒビキは放置された。

「ポケモンの卵！初めて見た！」

「私も」

コトネと二人で、ケースに入った卵を見る。

「ほっほ…すまんが卵は一つだな。卵を手になできなかった子は、この『リーフのいし』をあげるから、我慢しておくれ」

笑うおじいさん。ポケモンじいさんと呼ばれているそうだ。

「…どうする、カノンちゃん？」

卵は、一つ。

「う〜ん…」

欲しくないわけじゃ、ないけれど。

「…コトネ、いただいたら？欲しいのでしょ？」

隣のコトネが、明るい茶色の目で、一心に卵を見ているから。

「えっ！？いいの、カノンちゃん!？」

譲ろうと、思った。コトネならきつと、卵を孵して大事に育てて

くれる。

「うん」

頷くと、コトネの顔がぱあぁあぁと輝く。

「…ありがとう、カノンちゃん！おじいさん！」

幸せオーラ全開で、卵が入ったケースを受け取るコトネ。

「大事にしておくれ」

「うん！」

子供みたいに無邪気に喜び、ケースを抱きしめる。

「ほい！お嬢ちゃん、どうぞ」

手渡された、灰色に近い石。葉っぱの模様。

『リーフのいし』だ。

「ありがとう」

『みずのいし』に、『リーフのいし』。貴重な道具が続けて手に入るなんて、私は運がいい。

鞆にしまつて、ふと思う。

今の私は、優しい顔をしているのだろうか。

だって、コトネがあんなに喜んでいいるから、ヒビキも、嬉しそうだから。

優しい気持ち。…いいと、思えた。

この気持ちが、人をきつと、『幸せ』にするのだろうか。

「あ！そこのお兄ちゃん、ルリとバトルしよ！」

キキヨウシテイと31番道路をつなぐゲード。その前に立っていたガキが、身の程知らずにも俺にバトルを仕掛けてきた。

「……………」

面倒なので、無視することにした。こんなガキ相手にバトルなんて、してられるか。

「ちよつと！お兄ちゃんつてば！バトルしようよ〜！」

ゲートに入ろうとすれば、そいつが両手を広げて立ちふさがる。

…邪魔だ。

「バトルするまでもない。…お前みたいなヤツに、この俺が負けるか」

こんなガキと俺では、バトルに…強さにかける思いが、違う。

俺は、道楽なんかで闘ってるわけじゃない。

俺は…

「…なによお！年上だからって偉そうに！…いつけえーナゾノクサ！」

ガキが投げたボール。現れたナゾノクサが、突進してくる。

「…ヒノアラシ」

「ヒノ！」

俺の声に答え、ぴよんと俺の頭から飛び下りるヒノアラシ。着地し、ぼあっと背中 of 炎を燃え上がらせる。

「…『ひのこ』」

向かってくる相手。…なんて、考えなしだ。

「ヒノオ！」

すっと息を吸い、ヒノアラシが『ひのこ』を吐く。

「…ナゾオッ！」

まともに喰らい、一撃で沈むナゾノクサ。…ふん。

「…弱いな」

戦闘不能となったナゾノクサに、駆け寄ったガキ。これで、進める。

ガキを押しつけてもよかったが、ぎゃんぎゃん騒がれると鬱陶しい。だから、倒した。

「行くぞ、ヒノアラシ」

「ヒノヒノ！」

…盗み出したヒノアラシ。こいつは、俺の頭の上にいるのが好きらしい。

何かあったとき、素早く対応できるようにと連れ歩いているのに、自分の足で歩きもしない。

「…お前、進化してものろうとするなよ」

今はまだいいが、マグマラシに進化して頭にのられたら、たまつたものじゃない。

「ヒノ ヒノ」

機嫌よく、ぺしぺしと俺の額を叩くヒノアラシ。

…こいつ、絶対わかってない…。

泣きだしたガキなんて目もくれず、俺はゲートをくぐった。強さを、目指して。

幾つになっても、男は男　くポケモンの卵、ゲットってことねーく（後書き）

『連れ歩き』。なんて素敵な文化でしょうか。…ジヨウト地方万歳！

ゴールドの赤毛の上のってるヒノアラシを想像するだけで萌えますな！素晴らしい図です！重さ？…それを言ったら、サトシのピカチュウはどうなるのです？

前書きでああ書きましたが、過激な描写はなしです。醸され、もしくは皆様の妄想にお任せします。

次回、初めての野宿編です。お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4861z/>

ポケットモンスター ~お嬢様とレックウザ~

2012年1月12日01時58分発行